

東京桑野会会報

●2005年4月1日発行●発行・編集人 古川清●発行所 東京桑野会事務局 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-3-8 YKB新宿御苑804



No.27



ご挨拶

東京桑野会会長
古川 清

- ①桑野の母校に学んだという共通の経験に結ばれた同窓の親睦の会であること
- ②会員はみんな仲良く相親しみ楽しい会であること
- ③何らかの意味で会員の頼りになるような面もある会であること

母校の創立120周年記念行事も無事に終了し、安中・安高の歴史は121年目に入った。5世代に亘って安積に学んだファミリーもあるというのだから凄いことである。

長い歴史を振り返ってみると、母校は幾度かの衝撃に見舞われている。第一は明治17年に福島市に開校しながら校舎が焼け、僅か2年後に安積郡桑野村への移転が決定されたことである。第二は昭和22年の学制改革であり、安積中学校は安積高等学校となり、就学期間も5年から3年に縮まった。第三は4年前の男女共学制移行である。この中で最大のマグニチュードをもってやってきたのは共学制であった。ご存知の通り、桑野会は磐高や磐女の同窓会と手を組んで反対運動を展開したが、県当局の方針を覆すことはできなかった。何ゆえ桑野会は反対運動を展開したのだろうか。私の考えでは卒業生のアイデンティティの維持に危機と不安を感じたからである。安積は一世紀以上も長きに亘り、県内有数の男子校として多くの人材を世に送り出してきた。おのずと校風が築き上げられ、卒業生は明確なアイデンティティを共有し誇りとしていた。男女共学制の導入はそのアイデンティティに重大な変更を要求するものであり、卒業生の意識に対して大きな変革を迫ることとなった。

幸いこの共学制は極めてスムーズに定着し、大学進学結果にも概ね改善が認められているのは喜ばしい。女子生徒の比率は4割に達し、生徒会会長が二代続いて女子が選ばれていると聞いた。「男子ガンバレ！」の反応を示す向きも

あるようだが、その意識こそがアイデンティティの危機なのである。幸い昨年の東京桑野会総会には、117期の新卒者3名（内、女子が2名）が参加してくれた。例年新卒の出席者が非常に少ないので、今後とも新卒者並びに若い世代の加入には力を注いで行きたいと考える。

また数年前より、東京花かつみ会（安積女子高校並びにその後身の安積黎明高校の首都圏同窓会）との交流が行われており、各々の総会に幹部役員を相互に招待することが定例化しつつある。この交流は今後積極的に進めていくつもりである。東京花かつみ会も共学制移行に伴うさまざまな問題を抱えている様なので、東京桑野会としても交流促進は充分意味のあるものと考えます。

他方、東京桑野会はここ数年間、会長・幹事長らが母校を訪れ、大学受験を目前に控えた3年生に激励を行ってきた。狙いは、東京桑野会の紹介と新卒者への参加アピールにあったが、昨年は日程の折合いがつかず実現できなかった。昔と違い生徒達の日程は相当詰まっている様であり、又意識も変化していると思われるので、3年生へのアピールは別の方法を考える必要があるのかもしれない。

いずれにせよ、東京桑野会の発展のためには次の要素が必要である。

1. 年次総会が全ての年齢層にとり楽しいものであること。
 2. 毎年多くの若い世代の入会・参加があること。
- この点、会員各位の御協力をお願い申し上げる次第である。

東京桑野会定期総会開催のお知らせ

東京桑野会のメインイベントである、定期総会と懇親会を次の通り開催いたします。多数の同窓会員の皆様に参加されますようにご案内申し上げます。

- 期 日 2005年（平成17年）5月20日（金）
- 時 間 午後5時——受付開始
午後6時——総会
午後6時30分——懇親会
- 議 題 1. 会務報告の件
2. 予算決算の件
3. 役員改選の件
4. その他
- 場 所 目白 椿山荘
東京都文京区関口2-10-8（TEL 03-3943-1101）
JR目白駅、地下鉄有楽町線江戸川橋駅下車
- 会 費 懇親会費 8,000円（学生は年度会費込み 3,000円）
2005年度東京桑野会会費 2,000円

東京桑野会は会員皆様の年度会費によって運営されています。

総会当日にご出席出来ない会員の皆様には、同封の振込用紙で年度会費2,000円のお振込みのご協力をお願い申し上げます。

◇準備の都合もございますので、出欠の返事は同封の葉書で5月13日迄にご返送下さいますようお願い申し上げます。

◇また、連絡もれもあるかと思われますので、先輩、同期、後輩もお誘い合わせのうえ、多数の出席をお願いいたします。

◇昨年度は、2004年6月19日に開催され、約200名の参加があり盛況でした。

母校便り

★母校は創立120周年という節目を迎え、数々の記念行事、記念事業が行われた。創立記念日9月11日には、「記念式典・記念講演会・祝賀会」が挙行された。数多くの関係者が一堂に会し、安積の絆の深さが実感された。また後日、「郡山発展の礎となった安積疎水を辿る」“安積野ウオーク”が実施され、安高生は30Km強を闊歩した。中には“ウオーク”ではなくて“ラン”した元気者もかなりいた。歩く様子は本当に楽しそうで、若さとは本当に素晴らしい。

★安積を語る時、“伝統”という言葉が必ずでてくる。その伝統は、誰かが始め、積み上げられ、変化を受け、創られてきた。学校祭は、“紫旗祭”と呼ばれるようになり、そして“伝統の”仮装行列は続いていく。120周年記念紫旗祭では、ルートと内容が変更され、市内行列のあと、各クラスのパフォーマンスが「開成山野外音楽堂ステージ」で実施された。急な雨で3年生のみのパフォーマンス、1、2年生は紹介のみ、残念。また、紫旗祭の名物は中庭での“大進撃”である。100期ごろが発祥時期との説がある。誠に威勢の良い「男子校の薫」の行事で、女子生徒にも男子校であった安積を感じさせ、大変に良い印象を持たれている。

★120周年の記念の年、部活動でも活躍が光っている。ラグビー部は、夏の県総合体育大会で優勝し、東北大会出場の栄を勝ち得た。冬の花園へは、あと一歩であった。野球部は夏の大会ベスト4。水泳部・陸上部はインターハイ出場選手を輩出した。国体には、剣道部・弓道部・ソフトテニス部から選手が活躍した。将棋部・囲碁同好会・放送委員会・写真部も全国レベルで活躍した。本会報が出る頃には、大学受験の結果もわかっていると思うが、学業の分野でも安高生の本領を発揮してくれることを願おう。

（渡部良朋 91期）

人が、季節が、集います。

味

お食事

伝統の味に季節の彩りそえて

- 料亭・錦水
- 松阪牛和風料理・離れ家
- レストラン・カメラア

宴

ご宴会

華やかな集いに17の大小宴会場

- 2,500名様までのパーティ、国際会議、ファッションショーなどのお集まりに。
- 最新機能の音響装置。

寿

ご婚礼

佳き日に永遠の幸せを営う

- 800名様までの日本料理、フランス料理、着席ご披露宴。
- 庭園での記念撮影も随時お撮りいただけます。
- チャペルでのご挙式も承ります。



CHINZAN-SO
椿山荘
03-3943-1101

東京桑野会「母校創立120周年記念式典」

平成16年6月19日（土）
目白の椿山荘にて開催しました

16:30～ 平成16年度東京桑野会総会
母校創立120周年記念式典
17:40～ 記念講演（湯浅譲二氏 60/62期）
演題：「アメリカの大学生活を顧みて」
18:30～ 記念祝賀会

平成16年度の東京桑野会総会および母校創立120周年記念式典・祝賀会が、東京目白の椿山荘にて開催されました。郡山からは、安積桑野会本部の石川博之会長（63期）、藤森英二郡山市長（64期）、安積高校の廣瀬渉学校長、滝田直人校内幹事（80期）のご来賓をはじめ、東京花かつみ会（安積女子高校の同窓会）からは木村登志子会長以下7名（高崎千鶴子、森田知子、内野富子、中村聡子、木口伸子、山田礼子）の元安女生をお迎えし、盛大に実施されました。



講演にうっとりの東京花かつみ会の役員



湯浅譲二氏の講演風景

会員の参加は、46期の高瀬禮二氏から前年度に卒業した117期の3名の新入会員まで200余名が一同に会しました。卒業以来数年・数10年ぶりに会う同級生や、昨年の総会以来1年ぶりに会う常連組の同窓生、初めて会う先輩・後輩など、楽しい有意義な時間を共有することができました。

120周年の今回は、特別記念講演として、音楽家の湯浅譲二氏が登壇しアメリカでの大学生活をテーマに、氏の思い出を語って戴きました。平成16年は母校が男女共学制となって初めての卒業生を送り出した年であり、東京桑野会にも初の女子会員が誕生しました。祝賀会で、廣瀬校長より117期の3名（内、女子2名）の紹介があり、父娘で安積OBとなった桑野会員の例も誕生したのです。総会・記念式典・講演会が大盛況となり、30分遅れで祝賀会が開始されました。18:30になり、ようやく待っての祝賀会。古川清会長よりご挨拶を賜り、参加中最高齢出席者の、高瀬禮二氏が乾杯の音頭をとって、祝賀パーティーが挙行されました。母校と安積同窓生一同の益々の繁栄と、今後とも続く130周年、140周年、150周年も盛大に式典を挙行できますよう、祈念します。

（芳賀雅美 86期）



式典の挨拶をする古川会長

公認会計士 星 武典 事務所

ムアーズ・ローランド国際会計事務所所属

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 3-6 共同ビル（錦町三丁目）6階

TEL 03-3291-8361 FAX 03-3291-8465

E-mail : takenori.hoshi@cac-cpahoshi.jp

星 武典(58期)

会員動向

○東京桑野会元顧問の鎌田正二氏（43期）は平成16年2月9日逝去されました。

○前パナマ大使の松津光威氏（71期）は平成16年8月12日逝去されました。

○柏書房社長の渡辺周一氏（73期）は平成16年9月16日逝去されました。

○山本佳氏（58期）は、東京桑野会囲碁倶楽部会長に就任されました。なお、副会長は谷本滋朗氏（63期）です。

新体制の発足を記念し平成17年6月19日（日）湯河原杉の宿にて一泊碁会を開きます。申込みは幹事代行の高松豊（74期）03（3333）6660T&Fまで5月中におねがいします。

○前クウェート大使の樽井澄夫氏（79期）は内閣府国際平和協力本部事務局長に就任されました。

海外の紛争後の復興や多国籍軍による紛争処理など、国際平和活動への自衛隊の協力を可能にするために政府が検討している、恒久的な政策立案などの責任者として活躍しておられます。

○田母神利雄氏（80期）は防衛庁統合幕僚学校長から航空自衛隊・航空総隊司令官（空将）に異動されました。

○荒井広幸氏（90期）は平成16年7月の参議院議員選挙（比例代表）で初当選されました。今後益々の活躍を期待しております。

（事務局からのお願い）

会員の動向に関して、皆さんからの情報をお待ちしております。当会事務局（電話03-3356-6677、FAX 03-3356-6678又はE-Mail：info@tokyo-kuwano.com）宛ご連絡下さい。

ご挨拶

安積桑野会会長
石川 博之（63期）

皆様お元気ですか。「120周年の裏話」でもお話し、120周年のお礼のご挨拶とさせていただきます。

ところで、親は、日頃我が子に喜ばせてもらったり、気をもませてもらったり、悲しませてもらったりして親の勤めを果たし、我が子の成長を見守っております。同窓会も親と同じ気持ちで日頃生徒達の活動に喜び、気をもみながら、先輩としての勤めを果たさせて戴いております。

120周年のお祝いに生徒達に何かしてあげようというのも、この気持ちの延長線にあるものであります。

早速、1年半前にPTA、同窓会、桜桑会の三会で120周年記念実行委員会を立ち上げ、記念事業の検討に入りました。

「生徒」が主役なら生徒の声を吸い上げよう。それには、学校関係者の現場の声を聞けばよい。そして、テーマと優先順位を考えて決めたのが、男子女子生徒が同時に合宿できるように合宿所（同窓会館）を整備する。受験対策のため3年生の教室にエアコンを設置する。開拓者精神を体得してもらうべく、安積歴史博物館に現在活躍している先輩達の資料展示室を設ける。これらをメインとすることにした。

高校生になると、男女共にパワーアップする。一緒の合宿は、問題が起きてからでは遅い。合宿所の改修は、男女共学に伴うインフラ整備である。

自習室の前を通ると、生徒達が近寄り難い雰囲気勉強している。せめて3年生だけの教室にはエアコンを入れ

るか。ある先輩、のたまわく「そんな甘ぢょろいことをするな。寄付なんかしないぞ」そんなこと言ったって時代が違うって。前倒しに設置した。一昨年は冷夏。先輩に頭上がらず。然し、昨年は猛暑、威力発揮、文武両道の実が挙がった。

安積歴史博物館の内に、現在活躍している先輩達の資料室のオープンには、いささか抵抗感もあった。現役は、「毀誉褒貶」というか、「浄化」されていない。生徒諸君が人生に悩んだ時に、既に展示されている1期生の明治の文豪高山樗牛博士が、また、1期生の京都帝国大学総長新城新蔵博士が、そして、4期生の世界的歴史学者朝河貫一博士ら、これら先人達がどのように学び、どのように背筋を伸ばして生きてきたかを勿論参考にしてもらいたいが、やはり、時代の流れ、社会の背景があるから、身近な先輩達の生き様も参考にしてもらった方が、生徒達の悩みを解決し、生徒諸君が精一杯頑張ることができるのではないかと期待して、現在活躍している先輩達、元世界医師会会長の坪井栄孝先生、世界的音楽家の湯浅譲二先生、5選を果たした佐藤栄佐久知事、芥川賞を受賞した玄侑宗久さん達の資料展示室をオープンしました。

昨年9月の記念式典で、生徒達のキラキラと輝いている姿に接した時、これでよかったのだと実感いたしました。

終わりにになりましたが、皆様のお陰を持ちまして、決算をすることができました。ご協力ありがとうございました。皆様方の益々のご活躍、ご健康を祈念申し上げ、お礼のご挨拶とさせていただきます。


 0120-821-110

トランクルーム

家財保管

転勤・改築・建替等

FAXでも受付しています

 0120-856-110 <http://www.wns.co.jp/flower>



おらわあ

引越センター

遠藤征志郎
(72期)

本社 東京都府中市白糸台1-23-10

関自振第1782号

「安積野ウォーク」

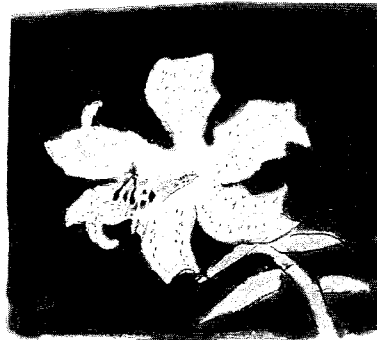
安積高等学校長 廣瀬 渉

安積高等学校は創立120周年を迎え、平成16年9月11日、本校体育館で盛大に記念式典が挙行されました。同窓の先輩の皆様方には物心両面にわたり多大なるご支援をいただきまして本当に有り難う御座いました。お蔭様で、創立120周年に相応しい記念事業や行事など立派に執り行うことが出来ました。心より厚く御礼申し上げます。記念事業の最後としまして、平成17年3月には、中国の上海にあります華東師範大学第二付属中等学校への訪問をはじめとする海外研修を実施する予定であります。2年生10名を派遣し、中国の高校生と交流する計画であり、多くのことを学び、自らの成長、安積高校の発展に繋がることを期待しております。

さて、記念行事の一貫としまして10月1日に「安積野ウォーク」を実施しました。猪苗代湖畔の浜路浜から御霊櫃峠を越え、安積歴史博物館までの約30キロを歩くという行事であります。郡山発展の礎となりました安積疎水を辿り、先人の偉業を偲び、開拓者精神を確認し、併せて心身を鍛えようという目的で実施しました。開会式では、本校第38期生であります今泉龜撤先生にご出席を賜り、旧制中学校時代に毎日約20キロを歩いて通学し、6年間無欠席であったことなどをお話いただき、全校生に激励の言葉を戴くことが出来ました。今泉龜撤先生は、11月4日郡山市制施行80周年記念式典におきまして3人目の郡山市名誉市民として顕賞されました。当日は日本晴れの素晴らしい天気にも恵まれ、全校生が発の合図と共にスタートしました。多くの保護者の方々が先生方と共に、途中の道筋に立ち、生徒たちの安全確保のためにご協力をいただき、御霊櫃峠では応援団のOBの方々が、校歌などを歌い激励していただきました。この行事は本校初めての試みであり、当初は不安もありましたが、先生方の綿密な計画のもと、多くの方々のご支援により実施に漕ぎ着けることが出来ました。午前9時30分にスタートし、午後

5時には最後の生徒が安積歴史博物館に到着しました。途中の脱落者が多く出るのではないかとすることも危惧されましたが、保護者の方々も参加し完歩されるなど、生徒達も頑張り、成功裏に終了することが出来ました。明治12年に着工し、3年の歳月と85万人の労力により完成しました安積疎水を辿り、猪苗代湖から安積歴史博物館まで歩いたことは、生徒達にとって貴重な体験であったと思います。ほぼ全員の生徒が完歩しことに感動し、安高生の意欲とパワー、チャレンジ精神を感じました。本校生がこの体験を生かし、安積の精神を真に自らのものとし、文武両面で活躍し、明日に向かって大きく成長することを期待し、そして安積高校の更なる発展のために努めてまいります。

今後とも変わらぬご指導ご支援をお願い申し上げます。



カット：山本 圭 (58期)

はじめての東京桑野会

森 まり子 (117期)

平成16年6月19日、私ははじめて東京桑野会に出席しました。その日は土曜日で授業などがあったため、総会、並びに記念式典には間に合わなかったのですが、記念祝賀会から参加させていただきました。東京桑野会には、私が想像していた以上にたくさんの方々が集まっていて、とても驚きました。そのためか、当日はかなり緊張してしまっていたと思います。しかし、久しぶりに安積高校の校歌を聞くことが

きたりしたので、高校時代が懐かしくもなりました。東京桑野会の後日、さまざまな方々からそのときの写真を送っていただきました。本当にありがとうございました。

そんな東京桑野会から、もう半年ほどが経ちました。当時は、まだ大学にも慣れておらず、毎日がただせわしく過ぎていただけのような気がします。大学に入学して9ヶ月が経った現在では、大学生活や東京での生活にも慣れ、楽しく過ごしています。しかし、そんな毎日の中でも、時々高校時代のことを思い出したりしています。「去年の今頃は受験勉強をしていたのかなあ」とか「高校のときの生活とは変わったな」とか、高校のときの話を友達としあったりします。

友達と話をするとといえば、大学には東京の人だけでなく、いろいろな地方から来ている人がけっこういるので、友達と話をしているときなど出身地のギャップを感じたりすることもあります。方言みたいな言葉の違いも多少ありますが、それだけでなく、習慣の違いといったものを多く感じます。東北や関東では普通にいつもしていることが、関西の方ではあまりやらないという話を聞いたりしています。そのたびにいつも、面白いものだなあと考えています。これは、東京で大学生活を送っているから経験できていることだと思いますし、東京に来てよかったなと思うときでもあります。これからは大学生活の中で、いろいろな経験を積んでいけるといいなと思います。

今になって考えてみると、高校時代に経験したことは、何かに役立っているような気がします。例えば、高校に入学してはじめて体験した応援歌練習は、当時はとてもつらいものでした。しかし、そのおかげで高校野球の応援などもできたと思いますし、今ではいい思い出になっています。そのうえ、大学での野球の応援も高校のときと似ていたもので、とてもなじみやすかったです。なので、大学生活で経験したことも、これからはなんらかの役に立つと信じて頑張っていきたいと思っています。

(早稲田大学商学部在学)

「特集—海外で活躍する仲間達」は、ホームページを開設した結果海外で、東京桑野会のホームページを見たと報告がありました。その仲間達に原稿をEメールで依頼し、特集ができあがりました。ホームページの威力に感心するばかりです。(広報部)

ベネズエラ便り

戸崎 喜和 (79期)

かつては日本よりも豊かな国であったらしいベネズエラに赴任してちょうど1年になりました。31年間音響機器メーカーに勤務し、英国に2年パナマに11年駐在の後、定年前でしたが第2の人生は違った畑で生きようと思い、国際協力の専門家としてJICAよりベネズエラの女性銀行に派遣され、女性零細企業経営を指導しています。

ベネズエラは日本にとっては遠い国のひとつでしょう。石油が出るので、わずかにマラカイボ湖の油田の写真など日本で見る事ができるでしょう。この国、かつては資本主義でアメリカ寄りであったが、どの政権もひどい汚職等で国民は疲れ果てていました。そこへ若い軍人上がりのしかも貧困層出身のチャベスが現れ、貧困層から金持ちまでの支持を獲得し政権を取りました。しかし根っからの貧乏性からか社会主義を目ざし、さらにキューバ寄りの政治をはじめました。大混乱のきわみです。

神様は非常に公平でベネズエラには天然資源を与えたが、有能な人間を与えなかったという笑い話があります。でも事実です。天然資源については南米の国々も大変豊富です。しかしベネズエラは石油という資源があるのでひときわ目立ちます。観光資源も非常に多いのですが、現地通貨をドルに交換できないとか、あまり親切でない国民性とかで期待したほど観光客は来ていません。世界一落差のあるエンジェルの滝とか20億年前の台地であるギアナ高地、そしてカリブ海の島々などは良く知られています。首都カラカス市は標高約1000mであり、夏の軽井沢の気候が1年中続いているようなので非常に過ごしやすいところです。車

で40分降りればもうカリブ海です。ですから人間もおおらかであり働く気持ちがないのもわかるような気がします。

熱帯地方特有のマンゴ、パパイヤ、パイナップル、メロン、グアバ等果物には事欠きません。安くて実においしいですね。ここに限らず南米の田舎料理はだいたいジャガイモ、豆、肉、トウモロコシで作ったパンのようなもの等があり日本人にはあまり違和感がありません。また日本料理店も数店ありますので食生活に困ることはありません。中国人の朝市では納豆、豆腐、餃子等手に入ります。生活費は日本の半分以下といえるでしょう。先進国の旅行に飽きてきたら是非ラテンアメリカにいらしてください。

最後に、国際協力関係では75期の村田さん、JICAアフリカ事務所の菅野さん、またプエルトオルガス市に3年間ほど滞在された遠藤和信さん(81期)、小生の前衛だった青木信博さん、そして知先生、お元気でご活躍、お過ごしいただきたいと思います。(パナマ駐在時に大変お世話になった松津元大使が8月に急

逝されたとのこと、心からお悔やみ申し上げます。)

(JICA専門官ベネズエラ勤務)

タイム・トンネル往還

今川 直人 (75期)

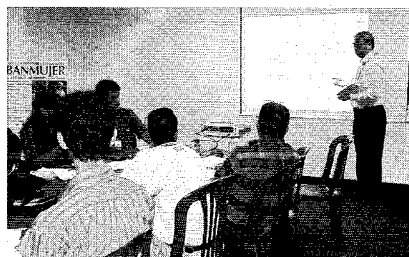
私は平成15年9月まで37年間「農協」に関わりましたが、この間中身の異なる二つの仕事に取り組むことができました。

戦後農協発展初期の昭和41年に就職し、平成10年までの32年間国内で働きました。農協は農業と共にありますが、この短い間に成熟期を経て衰退期に入りました。特に後の10数年は国内農業の縮小期で、この時期に主に農政と広報業務に就きました。伝統的な活動中心ではなく、農家・農協の自助努力を求める姿勢で臨みました。しかし農産物輸入の拡大(品目・数量)とこれに起因する耕作放棄地の増大や農家の減少が長期に進行し、「国際化」を強く実感させられました。

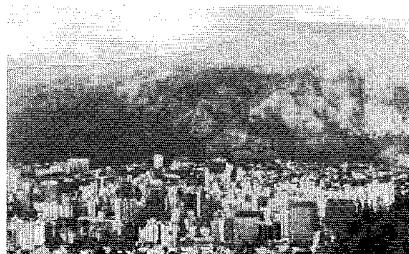
平成10年から15年までの5年間、JICA専門家としてベトナムで農協育成に当たりました。ベトナムは、1997年に強制加入の合作社に代えて任意加入の農協制度を創設しました。法律を施行し日本の指導を待っていると言う状況で、仕事はしやすい環境にありました。1年の約束が延長続きで5年の滞在になりました。

仕事は、最初に選んだ全国150の積極的な農協を対象に、2週間の組合長研修、実態調査(年次統計)、農産物共同販売や金融事業の指導、大都市での農協店舗の経営、書籍の発行、日本の農協との人的交流、空白地帯での農協作り等に取り組みました。収穫物を国に納めていた旧合作社(国营集団農場)は市場販売の経験がなく、農産物の共同販売が農家、政府の双方から強く期待されていました。最後の2003年には、5年の試行を踏まえた法律改正に提言を行い(2004年7月改正)、政策局が農協局に改組されました。

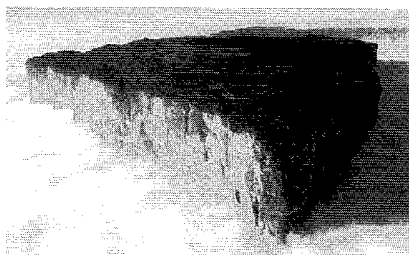
ベトナムの農協の経済事業は肥料の共同購買が中心です。また、制度面でも、加入の自由や出資配当制限(協同組合は投資の対象ではない)が不明確でした。



経営指導風景



カラカス市



ギアナ台地

年々進歩していますが、ヴェトナムの農協には日本の明治期や戦後の姿が残っています。

平成15年9月に帰国し、10月から農業者年金(サラリーマンの厚生年金に相当)の推進に当たっています。ヴェトナムに行っている間にも農業の担い手が年々減少し、いまや耕作放棄地が至るところ累々としております。ヴェトナムでは農業者を農外就労に誘導するのが急務ですが、日本の農業者年金は「国が助成して老後を保障するから百姓をやって下さい」という制度です。この制度を農家に知って頂くことが私の仕事です。

最後に、ヴェトナムでの活動について、JICAに改めてお礼を申し上げます。
(独立行政法人農業者年金基金 理事)

ドイツで

須田 栄 (107期)

107期卒の須田です。今回、機会があり本稿の投稿となりました。読みにくい点予めお詫び致します。

今こうしてドイツにいる経緯は、余り優秀でなかった学生生活後の就職そして転職の結果です。

転職時は未だ日本企業であったので海外赴任など考えも及びませんでした。直後、外資の完全子会社に成り果ててしまいました。(←元々は戦時に国策企業として出来たらしい)

私の人生設計において海外生活などは有り得ないものはずでした。よって、これまでの人生で最も学んだ外国語(英語)は受験と単位の為以外のものではなく、意思伝達のツールとしては機能していませんでした。文章を読む程度でしょうか。現在は独語で仕事をしていますが、会話で全てをやり取りする程の語学力はないので、先ず詳細をメール、すぐ電話で確認のスタイルです。なので、初めてコンタクトを持った人は必ず「綺麗なメール書くのにどうしてそんなに話せないの?」との問いを投げかけてきます。(←典型的日本人といったところででしょうか)

さて、そんな感じで何とか仕事をしている訳ですが、仕事に対する姿勢に違和

感が湧いてきます。その最たる例は客への対応です。分業がしっかりし過ぎているため、枕詞「日本の客からの問い合わせだけど」を付けた瞬間「私は基礎開発担当でお客対応ではない、あっちへ聞け」となります。「あっち」と言われた人に聞くと、「その件は基礎的な問題だから、あっち」と戻されます。これが日本の見ず知らずの担当君からのメールであれば確実に放置されて、客への回答期限に間に合わないと言ったパターンにはまるでしょう。また、2、3週間の休暇が当たり前なので、その間の仕事が。

まあ、そうそう悪い事ばかりではなく、外国人の私が英語ではなく独語で一生懸命コンタクトを図ると対応が良かったりします。要は人が見えるかどうか。世界のトヨタ様の強気な要求だけを見れば、即「無理」の返事をするでしょう。でも、相手の「一生懸命さ」や「どうして」が見えれば意外と動きは早いです。ドイツ人を動かそうとしたら「明確な理由とその重要性を切々と説く」が鍵であると感じました。でも、私は現場あがりの典型的日本人なので勢いで何とかしてる点は否めませんが。

何ともまとまりのない話になりましたが、次の2006年ワールドカップはドイツです。そして私の帰任はその直後です。海外赴任の理由はそれだけ?です。

(Robert Bosch GmbH ドイツ勤務)

アメリカ人になってきた

安田 常宏 (74期)

何か書いて下さいと言われると、なかなかいいアイデアが出て来ません。よく聞かれる事が、2つあります。1つは毎日どういう事をしているのですか。そしてもう1つは、アメリカと日本を比べてどちらがいいかという事です。

最初の質問は、医師の仕事の事を説明すればいいのですが、私は、大学病院勤めで開業をしていないので少し他のアメリカ人の医師とも違います。我々の高校、大学の頃はベン・ケーシー等のTV映画があって、脳外科医師がカッコよくてきばきとやっているのが、現実ばなれしている感じで記憶に残っています。アメリ

カの医療産業は、ここ10年産業革命にあり、コスト高で医師、業者との大切な会話が減少し、そして病院は生存競争に勝つため、お金の節約、そして広告と銀行や大会社とあまり変わりなくなりました。私のマサチューセッツ・ハーバード附属教育病院でも、会社の管理者を雇い、経営をコンピューター化し、やる事全部お金に計算してやります。1990~2000年の10年間に数知れぬ多くの病院が、経営苦難に陥り、倒産していきました。生き残った病院は会社経営のようになり、我々中年と老年にかかっている医師は、みんなこの天から降って来た悲劇について行けずやめていきました。

60才を過ぎると、いい時、そして悪い時、両方を経験できるので親からよく聞いた事を思い出し、世の中に順応するようにしています。日本でも岩戸~神武景気、そしてデフレとみんな同じような事を経験し、生きる事は何ほど大変だなぁと思う毎日です。でも、毎日元気に仕事をしています。

アメリカと日本は違うか、そしてどのように違うか?アメリカ人は大体において、楽天的、大陸的、そして生活をエンジョイする事が好きです。できる人、よく働ける人は、かぎりなくおり、どうしようもない低層世界も多くあります。又、自由主義が徹底しており、個人主義も非常にはっきりしており、POSITIVEの面が出ればよくいきますが、NEGATIVEになると大変です。自由主義は無責任になり、個人主義はエゴイズムになり、もちろんアメリカ人はこの面は好きではありません。私の大きくなった子供2人(25才の娘、22才の息子)を見て、将来何をやるだろうと考えています。私はボストンの西郊外のウェルズリー町に住み、静かで豊かな教育のある所です。アメリカに移住して30年ここに住めるのは幸運です。結局、どこに住んでも楽しければ、そして健康であれば、あまり変わらないと思います。私もアメリカに慣れ、家族があり、外国から帰って来るとやれやれ我が家に着いたかという感じです。これは日本から帰って来ても同じでアメリカ人になってきたなあとと思います。
(ハーバード大学附属教育病院 医師)

松津光威君のこと

塩谷 哲夫 (71期)

私は一昨年から、1年の過半をブラジルに駐在して、日系農業者の活動を支援する仕事をしている。ブラジルに届いた増子邦雄君からのメールには、「次の会報は、海外で活躍する安積卒業生に焦点を当てた特集にしたい」とあった。気軽に「いいよ」と返事を出しておいた。秋に帰国してみても驚いた。留守中に発行された会報に、デカデカと、私のことが載っているのではないかととてもうれしく、また、名誉なことではあるが、ビックな湯浅先輩と肩を並べているなんてと、恐縮してしまった。それに、私は、日本とブラジルを行き来する「二足のわらじ」の身であって、まだまだ海外で活躍なんておこがましすぎる。

そこで、私のことはもういいから、誰か、この企画にふさわしいやつはいないかと、安積71期の3年のうちのどこかで同級生だった友人を思い出してみた。私が前から知っている範囲では、まず、卒業後3年目にブラジルに雄飛し、今やその夢をかなえてアマゾン東部のトメアスで立派に農業をしている鈴木耕治君がいる。また、柳田重雄君はいつからだったか定かではないが、もうずいぶん前から香港で活躍しているはずである。いずれ、彼らに、おそらく「波乱万丈」に違いない彼らの歴史を、会報で語ってもらいたいと思う。

そして、もう、自らでは語れなくなってしまった友人として松津光威君がいた。「いた」と、過去形で言わなければならないことが、残念で、悔しい。だから、今回は、私が知っている松津君のことを話したい。

彼は昨年8月、パナマ大使を辞して帰国後、急逝してしまった。新聞報道を見た姉からのメールで知って、「えーっ」と絶句してしまった。彼が大使になったすぐあとで、増子君たち郡山の仲間が、新宿で集った。そのとき、私はパナマ運河の話をした。水位を上昇させて船を運ぶための水が、周辺地域の開発で山の樹を伐ったために不足しているらしい。松津君の陣中見舞いを兼ねて、パナマに樹

を植えるに行こうよとみんなを誘ったことがある(私の頭には、そのとき、「アンデス・アマゾンに樹を植える会」の構想があった)。まず、同じラテンアメリカ圏にいる私が、パナマにいる松津君の所を訪ねるつもりで、既にルートやスケジュールを考えていた。しかしそれはかなわぬ夢となってしまった。2002年にパナマでの「世界水会議ラテンアメリカ大会」では、世界各国からの参加者に、松津大使が歓迎の挨拶を述べた(縁あって、私から要請した)。

私は、彼が前任地のメダン(インドネシア)の総領事をしているときにも、彼を訪ねている。「任地まで来てくれたのは塩谷君が初めてだよ」と、彼は喜んでくれた。そのころは、「メダン」と言っても、一般には「それ、どこなの?」と言われた。しかし、悲しいかな、今はメダンはスマトラ沖大地震・インド洋津波の救援基地として毎日のテレビや新聞の報道に出てくるので、多くの人に知られることになっているのではないかと思います。スマトラ島北部の中心都市メダンの日本領事館は、管内に巨大な高原湖のトバ湖を水源とする水力発電を利用したアルミニウムの大産地を擁し、マラッカ海峡を挟んでマレーシアと対峙している経済的、軍事的に重要な地域にあり、この地域の日本の企業や日本人の活動を領事している。

彼は、私と同行の友人のTVプロデューサーを誘って、トバ湖や周辺の農村地帯を案内してくれた。3人で湖畔の宿に泊まり、遊覧船をチャーターして、湖や沿岸の村の史跡・民俗を探訪した。松津君は「久しぶりに休暇を取れたよ」と精一杯背伸びをして、湖を渡る風に吹かれていた。3人の話は、ついつい子供時代の戦争のこと、貧しかったけど夢があり、やんちゃだった少年時代のことが多くなった。懐かしく、楽しかった。松津君は、郡山の如宝寺前の角のタバコ屋の息子で、金透小学校では隣の組だったが、なんとなくお互いに存在を認めあっていた。安高で同級生になって、性が合って、遊び仲間になった。私の結婚式では、同郷の幼馴染として、彼からお祝いの言葉をもたらした。

清廉潔白な彼は、公私のけじめをはっきりつけていたので、私たちは領事館を

訪ねることもなかった。ただし、私は、公邸の植木類に、剪定のはさみを入れさせてもらった。

彼が公務の日に、私と友人はスマトラ農業の調査のために、アブラヤシや紅茶のプランテーションを視察した。そのとき案内してくれたインドネシア人が、「松津総領事はメダンの各国領事の協議会の議長として、皆さんに信頼されているんですよ」と、私たちに話してくれた。私の知っている彼は、いつもまわりの動きを把握していて、冷静沈着、慌てず、騒がず、おだやかに反応し、ポーカークフェイスだった。こんなキャラクターが外交官に向いていたのかと思う。

私が松津君に聞きそびれていて、今、知りたいと思っていることが一つだけある。「なあ、松津君、松津君があそこ書いていた小説、どこにあるの?」。彼は、大学生時代、「小説書いてるんだ」って言ってた。それが、「松ちゃん、外交官試験受かったんだって」と聞いたとき、「そんな希望があって、しっかりやってたんだ。小説はどうなっちゃうんだろう」と思ったけど、そのままになっている。何書いてたんだろう?

松津君、大丈夫。私の中では、松ちゃん、ずっと生きてるから!
(東京農工大学名誉教授・全拓連ブラジル農業技術普及交流センター所長)

中国での単身起業

渡辺 剛司 (104期)

今は中国ビジネスブームです。上海が目目されていますが、私は広東省の深圳市というこの20年で最も成長し、中国の経済成長のビジネスモデルともなった場所にいます。

3年前に、私が勤めていた会社も同様、中国ブームに乗って、私を中国資本の物流会社に出向させる事となりました。現地での職場での日本人は私一人、しかも私は中国語が話せない。中国に行く前に駅前留学をして中国語を少し勉強しましたが覚えた言葉は「私の大好物は蟹です」という何にも役に立たない言葉のうえ、それさえも通じなかった。でも、学生時代に大道芸をしながら25カ国を一人で放

浪していた経験があったので、異国での生活に慣れるノウハウはありました。

ようやく、中国語も片言のように話せるようになった頃、私を中国に派遣してくれた会社が潰れてしまいました。

多少の驚きはあったが「まあ、これはこれで人生だし、まだ20代だし」とその時はなぜか達観しており、中国で一旗揚げようと思い早速香港で会社を設立し、現地日系企業向けに中国の物流システムの再構築を提案して活動を始めました。

今は、日系企業の中国での業務支援、中国保税物流の提案、中国からのオーダー商品の製造請負、現地のビジネスセンターの運営をしています。

<http://www.cap-jpn.com/>

と書けばブームに乗った青年実業家のように思われますが、まだまだ食べていくことがやっと、しかも食べる物は一食100円のお弁当です。中国人の友人にご馳走してもらったり、中国人の彼女に食わせてもらった時期もありました。中国人の助けがなければ今の自分はないと思います。

しかし、仕事となれば別。毎日喧嘩のような業務です。もちろん中国の国民性を受け入れているつもりはあるのですが、日本と中国の橋渡しの役割を担う立場としてはそのギャップを埋めることが大きな仕事です。中国から商品を買ったとき請求書の金額が見積書の金額より高かった時は日本的見地から言えば「騙したな」となるが中国の見地から見たら「騙したとは何だ、見積書を書いたやつのみすだ、俺のみすじゃない」となります。

このような中国企業はまだ喧嘩のしよがあるが、行政だとそうは行かない。仕事上、管轄税関に出入りしているが、中国の連休前には必ず貨物が通関で止まってしまう。その都度「春節快樂（お正月おめでとう）」とか「国慶節快樂（国慶節おめでとう）」とか「労働節快樂（メイデーおめでとう）」とか言って、担当者にお年玉のような物（生々しいので、このような表現にさせていただきます）を窓口の担当者にあげに行く。窓口担当者では問題が解決しない場合は、当局の偉い人に電話をする。「挨拶に伺いたいのですが」というと、食事に誘われる。あまり食事の付き合いはしないので、これは大変だと思い、いつもより多めにお

年玉のような物を準備する。指定されたレストランに行って、偉い人との食事も終盤になり、税関で止まっている貨物の話をしてお年玉のような物を渡そうとするが、なんと受け取らない。「この偉い人は良い人だ」と感激し、食事代をこちらで持とうと勘定をした。お勘定を見て驚いた。相場の10倍以上の金額が書いてある。呆気にとられて、管轄の偉い人をチラッと見た。その偉い人がニヤリとして言った。「渡辺先生。これだと領収書もらえるでしょ」

財務上の使途不明金が無くなる。良かった。ギャップを埋める仕事はまだまだ続きそうだ。

(株C.A.P.社長)

「朝河貫一博士 顕彰協会」発足と 入会のお願い

糠澤 修一（72期）

2004年（平成16年）は、政治・経済・教育・外交全ての点で日本の分水嶺となった「日露戦争」から100年、そして2005年（平成17年）は、ポーツマス条約締結から100年を迎える。「朝河貫一博士顕彰協会」は奇しくもこの節目の時に設立された。

◇ ◇ ◇

「朝河貫一博士顕彰協会」の設立発起人総会は、平成16年5月22日（土）11時から郡山市のホテルハマツに関係者150人が出席して開催された。1年余にわたって準備委員長として推進してこられた矢吹晋氏（安積70期・横浜市立大学名誉教授）が経過報告を行い、協会の設立を満場一致で承認したあと古川清氏（安積63期・東京桑野会会長前東宮太夫）を初代会長に以下の役員を選任した。

▷会長 古川清▷副会長 須佐喜夫・新澤昌英▷監事 本田哲夫・水口禎▷代表理事 糠澤和夫▷副代表理事 矢吹晋・高城勤治▷常務理事 糠澤修一・渡辺剛・冬室保秋・武田徹・増井由紀美・佐藤司▷理事 我孫子健一（郡山）柿沼良訓（須賀川）高田宗彦（本宮）佐々木道昇（二本松）藤原孝雄・佐藤捷善（以上

福島・川俣）堀内敏男（いわき）阿部静雄（会津）猪熊豊人（白河・県南）鈴木直（関西）。

◇ ◇ ◇

設立にご賛同を頂いた400余名の会員でのスタートである。東京桑野会会員各位始め、今後多くのご入会をお願いしたい。

問題はこの顕彰協会が何をどうしようとしているかである。福島県教育委員会には、ホームページ“うつくしま電子辞典”に明治期から今日までの県出身の先人偉人と言われる方々215名（各市町村推薦）を掲載した。トップバッターは、大改修まで米国の自由の女神像の中に揃って掲額されていた朝河貫一と野口英世である。孤高の学者としての印象が余りに強すぎる為、近寄り難い存在——食わず嫌いで今日に至ってしまったことが惜まれる。

顕彰協会の最大の目的は戦争の世紀——日清・日露戦争から満州事変、日中戦争そして太平洋戦争に至る——日本の姿を冷静かつ客観的に見つめ、今の国際情勢の中でも十二分に利活用出来る“不変の羅針盤”——小論文、書簡を数多く残していることをまず紹介したい。そして二十世紀を代表する巨人、人間朝河貫一をより身近な存在にすることにあり。

『日露衝突』『日本の禍機』等の代表的著書をはじめパールハーバー前夜に日米開戦を阻止しようとした『天皇宛ルーズベルト米大統領親書』の草案作成運動、更には日本の歴史（封建社会）を世界に初めて紹介した不朽の名著『入來文書』などをもっと分かり易く親しみ易い存在にしていきたい。

◇ ◇ ◇

博士の出生地二本松市では、毎年中学校生を米国ダートマス大学、イェール大学に派遣する事業や朝河フォーラムを開催しているが、顕彰協会としても博士が揺籃期を過ごした福島市の立子山の天正寺を訪ねる歴史探訪「小さな旅」を毎年8月最終週（平成17年8月27日（土）予定）を実施しているほか、分かり易い小冊子『今に生きる朝河貫一』（税込500円）を発刊、発売中である。

◇ ◇ ◇

《朝河貫一博士顕彰協会連絡先》

TEL/FAX024-558-5261

事務局 糠澤修一

（福島テレビ 専務取締役）

ホームページ創設 2年目を振り返って

—2年目の活動と

アクセス状況実績の報告—

<http://www.tokyo-kuwano.com/>

芳賀 雅美 (86期)

(東京桑野会ホームページ委員長)

一昨年2003年3月1日(土)正午にグランドオープンしました当会のホームページは、システム障害などのトラブルもなく無事に2年目を終え3年目に突入しました。東京桑野会会員の皆様には、益々のご利用に感謝しております。第2年度の1年間にホームページ委員会にて実施しました改訂・追加事項と、会員の皆様のアクセス状況につきましてご報告致します。

ご存知のとおり、昨年は母校創立120周年の記念の年でした。一昨年末に「創立120周年記念頁」を立ち上げ、未完ながら一部のコンテンツで皆様にご紹介を始めました。昨年はこれを1年間かけて充実化し、なんとか完成させました。「安積120年の風景」をテーマに、年次的にアルバムとして写真を掲載し、現風景との対比を意識しました。いかがでしょうか。感想を掲示板に投稿して頂けたら幸いです。

6月の東京桑野会での記念式典や、9月の本校での記念式典についての報告も、ホームページ上で紹介しております。本校での式典は、ライブ中継でネット配信されました。関係者の努力に感謝しま

す。現在録画でも見ることが出来ます。東京桑野会のメニュー画面からご覧下さい。

一昨年「個人情報保護法」が制定され、今年2005年の4月1日から施行されます。ホームページだけの問題ではありませんが、安積桑野会に集められる同窓生のプライバシー情報も当然保護されるべきものです。当会ホームページ上に解説の頁を設定しましたが、個人情報の暗号化や通信面での技術的な改善を進めていきたいと考えています。

さて当ホームページへのアクセス状況ですが、この原稿を書いております1月までの経過をグラフで示します(別掲の図を参照:2005年1月は見込みの数値です)。訪問者人数は、昨年の2004年11月15日(月)午後2万人を突破し、さらに12月11日(土)午前には、のべ閲覧頁数が20万頁を越えました。ペースとしては、開設1年目よりもやや早い展開となっています。

あいかわらず人気の高い頁は掲示板です。2年目だけの集計でも、総閲覧頁数の23%が掲示板となっています。最近では、書き込みをしてくれる方が減少していますので、ぜひ皆さんにもっと利用して頂きたいと思います。同窓会でのOB間交流に、サークル活動や催し物の連絡用としてもお使い下さい。

今後とも会員の皆様のご期待に沿えるよう、充実したページ作りに励みたいと考えておりますので、なお一層のご愛顧をお願いします。

(出光興産株式会社情報システム部)

ホームページ掲示板 よもやま話

当会ホームページの掲示板から抜粋した、興味ある話を一部だけ紹介します。

映画「百万人の大合唱」(若林豪、酒井和歌子 主演)

日時: 2003/12/29 09:32

名前: 監督 須川栄三

参照: <http://movie.goo.ne.jp/movies/PMVWKPD19647/index.html>

映画「百万人の大合唱」に関する情報提供をお願いします。

昭和46年の9~10月に、安積高校の構内で撮影されました。当時の在校生・教職員が多数エキストラ出演をしています。なんと、男女共学の高校の設定となっており安女生も多数借り出されました。

制作:近代放映、配給:東宝、監督:須川栄三、脚本:高島久、音楽:山本直純(出演もしています)、主演:若林豪、酒井和歌子、一般放映:昭和47年2月26日~。

【解説】

市民の力によって東北のシカゴと呼ばれていた暴力の街から東北のウィーンと呼ばれるようになった福島県郡山市で実際にあった、音楽で暴力を追放した事実をもとに、音楽のもつエモーショナルな力と、人間の内在されたエネルギーの凱歌を歌いあげる。秋吉茂の原作を「銭ゲバ」の高島久が脚本化した。監督は須川栄三。撮影は「喜劇 男の顔は人生よ」の高村倉太郎がそれぞれ担当。

【あらすじ】

添付のURLを参照してね!

【思い出】

若林豪のふんする安高教師「新田司」が、撮影当日出張で不在だった社会科の菅野宏先生の机(旧本館内)に座って演技していた。また、吹奏楽部の部員達のシーンでは安女の吹奏楽部員と共に安高吹奏楽部員が、実に楽しそうに(やや緊張しながら)エキストラで出演していた。もちろん新田司先生の授業風景も男女共学となっており、神聖なる男子校「安積高校」の教室でエキストラの安高生と安女生が、セリフのある生徒役の役者さん達(もちろん男女)と共演していた。新田司先生の恋人である渡部昭子(酒井和歌子)が撮影現場に入ると、野次馬のわれわれ一般生徒は「ウォー」と雄たけびをあげ、休憩中にサインを求める嵐が吹いた。Tシャツやら授業に使っているノー

東京桑野会ホームページアクセス数分析

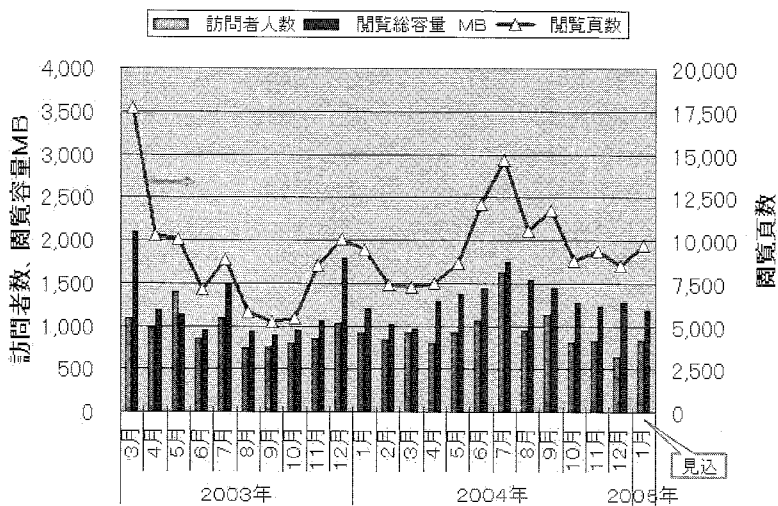


図:東京桑野会ホームページへのアクセス状況

ト、下着のランニングシャツにサインを求めている奴もいたっけ。

当時のことを覚えているOB諸君・先生方、この下にレスをお願いします。

転載します (No.1)

日時：2003/12/29 09:44

名前：がっちゃん

Re: 名物先生を語りましょう！

日時：2003/03/14 12:53

名前：芳賀雅美

蛇足ですが、昭和46年頃（私が安高生の時）に酒井和歌子主演（男優は若林豪）の映画を安高の構内で撮影したことがありました。若林豪が先生役で酒井和歌子がレコード店の店員で若林の恋人役だったと思います。エキストラで出演した先生・生徒の皆さん、覚えておりましたらカキコミして下さい。音楽の郡司先生なんかスゲーアップで映っていたように記憶しています。題名は「百万人の大合唱」という、地方の暴力団を一掃する青春ものだったと思います。

酒井和歌子がタバコ吸ってた…

日時：2003/04/17 23:36

名前：ジーエフ91

芳賀様

>蛇足ですが、昭和46年頃（私が安高生の時）に酒井和歌子主演（男優は若林豪）の映画を安高の構内で撮影したことがありました。若林豪が先生役で酒井和歌子がレコード店の店員で若林の恋人役だったと思います。エキストラで出演した先生・生徒の皆さん、覚えておりましたらカキコミして下さい。

というカキコミを読んだ、某・ウチのカミさんが、「思い出した！！！」

市民会館だかで「百万人の大合唱」のシーンを撮るために沢山の市民が参加した。小学生であったカミさんが、そのロケシーンを見にいったとき、窓に手をかけて申をのぞき込んだら、そこは偶然にも「酒井和歌子」さんの控え室だった。そこで、小学生は見てしまった…。その夜の小学生の家庭での会話は：
【小学生】『酒井和歌子っていう主役のひとつが、部屋でタバコ吸ってたの見ちゃったよ』

【おとうちゃん】『ええっ、あの酒井和歌子がかっ！！！！！！』

以上、「小学生は見た（主演；酒井和歌子）」でした……。

岸田森も忘れないで (No.2)

日時：2003/12/30 08:30

名前：矢部刑事

宮原総合病院の院長・宮原役の岸田森（キシダシン）を忘れては困る。助演男優賞をあげたい。ふたりの主人公を助け励ますカッコいい役どころ。若林豪+酒井和歌子+岸田森のトリオが、郡山市を支配する暴力団に立ち向かう。古くは、「帰ってきたウルトラマン」の坂田隊員、少し前の「太陽戦隊・サンバルカン」の嵐山長官、「南極物語」の喫茶店のマスタ役。うーん、故人になってしまったけど惜しかった。

ぜひ見たいよ、その映画 (No.3)

日時：2003/12/30 18:57

名前：通りすがりの岸田森ファン

岸田森の大ファンです。どこで見られるのですか？安積高校がロケ地になっているのですか？前に、歌のベストテンで中森明菜が生中継でTV撮影していたけど、岸田森も安積高校にロケに来ていたのですね。ビデオになっているのでしょうか？誰か教えてください。すごいトリオですね。面白そう。

Re: ぜひ見たいよ、その映画 (No.4)

日時：2003/12/30 23:07

名前：矢部刑事

通りすがりの岸田森ファンさんへ
もう一度見たいんですけど、もう無理なのでしょうね。私が見たのは、昭和47年の3月でした。ビデオやDVDは聞いたことがないし、たぶんこれからも出ないでしょう。

ちなみに、デビュー当時の吉田拓郎が映画のワンシーンで「今日までそして明日から」をギターで弾き語りで歌っていました。♪♪「私は今日まで生きてきました〜」。ぜひ見たい気持ち良く判ります。

Re: 映画「百万人の大合唱」(若林豪、酒井和歌子主演) (No.5)

日時：2004/01/02 14:08

名前：KAZU

明けましておめでとうございます。
私ももう一度見たい気持ちでいます。われわれは郡山JCの例会で平成5年の3月に郡山商工会議所の大ホールで一度上映したのですが、どうして郡山市で資料として持っていないのでしょうか。

画像は悪くなっていてもビデオにでもしてもらえれば安積のOBを中心に相当な本数売れると思うのですが。

Re: 映画「百万人の大合唱」(若林豪、酒井和歌子主演) (No.6)

日時：2004/10/12 20:52

名前：渡邊龍一郎

81期の渡邊です。

現職はクリエイター向け専門誌「Directo's MAGAZINE」の編集長をしています。

東宝映画「百万人の大合唱」の郡山ロケーションの話を懐かしく読ませていただきました。もう30年以上も前のはなしになりますね。当時私は日芸映画科の3年生で、この映画では4th助監督を勤めていました。助監督とは名ばかりで、ようは使いっばりです。学生だったので当初は一人前として扱ってもらえませんでした。スタッフの定宿は磐梯熱海の栄楽館さんでした（毎日ロケバスで郡山まで通った）が、初日のスタッフ・俳優が顔を会わせた夕食の時でした、須川栄三監督がせりふは郡山弁をつかうからそのつもりでいるようにと俳優部に言い渡したのです。助監督の先輩たちは打ち合わせになかった話なので、方言指導の方を手配していませんでした。若林豪さんなどもエーっという感じでした。場が結構ざわつきました。

そのとき私は末席でスタッフにお茶などついていたのですが、制作主任がここにいる渡邊君が地元の出身ですと大きな声で言ったものですからすぐに監督がいる上座へ呼ばれました。そして即座に方言指導を厳命されました。それからが大変だったことはお察しのとおりです。毎日台本のせりふを郡山弁に直し俳優に伝え練習してもらい撮影に入る、須川監督がカットといてシューティングが終了するとすかさず「なべちゃんどう？」と聞いてきます。

私はべいべいの身でありながら現場では監督に次ぐ決定権者になったのです。安高のロケはとでも誇らしかったです。吹奏楽部の後輩先輩が駆けつけてくれて撮影が順調に言ったことなどいい思い出です。

昭和46年度に在籍していた安高生（85期・86期・87期生）は、もちろん記憶にあるでしょう。映画「百万人の大合唱」の安高ロケのことです。助監督を務めた81期の渡邊さんの逸話も登場し、たいへん楽しい会話になっています。

当会ホームページの掲示板は、皆さんに解放されています。自由に新しい掲示板を立てたり、他人の掲示板に書込みをしたり、情報交換や意見交換と見るだけでも役に立ちます。同級会の連絡や、同好会の募集、共通の話題による昔話といったように、用途はたくさんあります。どうぞご利用ください。

（東京桑野会ホームページ委員会）

私が選んだ 学びの場—安積

小檜山 綾那 (120期)

今年で創立120周年を迎える安積高校への想い。とは言っても、私は運良く節目の年に入学することができただけであり、その時その時の安積に数々のドラマがあるのだと思う。同じドラマなど、ひとつとしてないのだ。しかしそれらの多くは、安高生の心に秘められたまま、その人とともに長い年月を越える。写真や記念誌などに残るのは、その中のほんの小さなひとかけらであり、今回そのひとかけらに選ばれた偶然と幸運に感謝したい。

さて、安積と私の出逢いは2年前にさかのぼる。なんと、論文とも言えないような私の拙い文章が「朝河貫一賞」を受賞してしまったのだ——とは言っても、当時会津地区の猪苗代中学校に通学していた私は恥ずかしいことに朝河貫一博士の名前さえ知らず、自分の名前が新聞に載るほど大きな賞だったことも全く知らなかった。ただ、表彰式の時に博士が現在の安積高校出身ということを知り、こんなに穏やかな微笑み方をする人が出た学校なら私も行ってみたいと憧れを抱いた。しかしその後「学区外受験」というハードルを知り、安高への想いは途絶えた。

それから受験生になり、高校見学の申込書が配布された。先生に勧められ、どうせ受験しないけれど見学する分にはいいか、と思い安積高校と書いて提出した。当日は塾の夏期講習と重なったため乗り気でなかったが、その日、私の考えは180度転換することになる。

今も耳に残っている、進路指導主事の先生の言葉。「諸君、死ぬほど勉強して、安積に来てください」

死ぬほど勉強するなんて言葉を聞いたのは初めてだった。なんなんだこの学校、と思った。猪苗代で私がのほほんとしている間に、安積にはこんなに熱い先生方の下で学んでいる人たちがいるのか、何だか、悔しい。私も死ぬほど勉強したい。やるなら、ここしかない。学区外だろうが何だろうが、9人の枠に入ればここで学べるのだ。やってやる——と、私の闘争本能が目覚めた。説明会のあとの安積歴史博物館見学で、私は朝河貫一博士の像を見つけた。興奮さめやらぬ私は、像に向かい「絶対安高に来てみせる」と誓

った。

それからの受験生活は、今思い出すと壮絶だった。毎日泣きながら勉強し、安積に行くためだけに生きているようだった。それでも不思議とつらくはなかった。実は、私の中には夢が芽生え始めていたのである。長い長い受験生活を支えてくれた学校の先生の姿に、私は自分の未来を見つけた。教師だ、教師になろう。しかし本当は、安積の進路指導主事の先生の姿を思い出していたのだと思う。あの一言がなければ、ここまで頑張ったりできなかった。そんな風に私も、可能性に溢れた子供たちに影響を与えたいと思った。そしてその一歩として、私は安積に挑むのだ——と。

そして掴んだ合格。長い長い受験生活に終止符を打ち、安高生になれる時がやってきたのだ。何より、初めて自分自身の力で未来を切り拓くことのできた喜びでいっぱいだった。手探りでも、何とか前に進もうと努力を重ねれば必ず自分の未来に返ってくるのだ、と感動した。私の決意は、間違っていなかった。

4月になり、晴れて私は安高に入学した。しかし、授業が始まり、ああ、私の教師への道がやっと始まる、幸せだなあ……と思っていたのも束の間、夢だった。一日が終わって家に着いてみると、肩に内出血、重い体、自分の足で立っているのがやっという有様だった。ただでさえ受験生活のおかげで体力の落ちた体に、片道2時間の通学、慣れない郡山という環境がこたえた。しかも知り合いもない。毎日毎日おしつぶされそうで怖かった。こんなことなら、やはり近いところにすれば良かったのだ……と何度も思った。しかし学校生活はそんな私を取り残すようにどんどん進んでいく。まるで嫌ならやめろ、とでも言うかのように。私は去年の夏の自分を恨んだ。あんな衝撃的な理由で高校を選んで、と。

しかし少しずつ友達ができ、生活のリズムが掴めるようになり、私は周囲を見回す余裕ができた。そして今、逢着した考えがある。

私は確かに、郡山市内から通学している人に比べれば時間の余裕がない。しかも慣れない環境で、周囲の人たちも皆レベルが高い。少しでも気を抜けば、どんなしっぺ返しを食らうか分からない。しかし、そんな悪条件だからこそ、さまざまな工夫（時間の使い方はもちろん、精神的な面でも）を凝らし、逆境に強い自分になれるのではないかと。そしてそれは神様や運命の力ではない。間違いなく私自身の選んだ道なのだ。安積という学びの場で、強く、大きくなるために。

こう考えられるようになったのには訳がある。毎朝校門をくぐる度、数多くの先人達が学んだ旧校舎(安積歴史博物館)と対峙するのだが、どんなに暗い気分の日でも、旧校舎は私に活力を与えてくれることに気づいたためだ。きっと私の中にも少しずつ安積の歴史や魂が注ぎ込まれてきたのだろう。そうだ、私は安高生なのだ。と自覚できた。それから再び闘争本能に火が付き、受験生の頃のように情熱を持って勉強できるようになった。毎日、生きているということに張り合いが出てきたのである。

それでも、心の糸が切れて弱気になってしまう日もある。こんなことで安高生だなどと言えるのか、と自分で情けなくなってしまうくらい、落ち込んで何もできなくなる日もある。しかし私も人間であり、世界の60億人の中のちっぽけな1人にすぎない。そんな私が頑張っていようがいまいが大したことはないのだ、もっと気楽に行こうと考えるようにしている。これも、最近考えられるようになったことの1つだ。受験生の頃の私だったら、落ち込んでいる暇はない、前へ前へという息もつけられないようなスピードで自分を奮い立てていたが、今は違う。もっと物事と間合いを取って考えた方がいいということにいつの間にか気付いたのだ。

こうして考えてみると、今ここには受験生の頃の私をかわいいもんだと思う余裕のある私がいるのだ。そして私は日々成長している。朝河貫一博士との出逢い、安高との出逢い……不思議な引力で今の私に辿りついた。安積でどれだけ多くを掴み取れるかという競争に身を投じた私が、卒業の日に、この120周年記念誌を開いて、今の私を「ふっふ」と笑えるくらいに成長し、朝河貫一博士の像の前で胸を張りたい、と切に願ってやまない。(萌ゆる安積野—創立120周年記念誌—より転載)

(安積高校在校生)

高校を卒業して 分かったこと

川前 徳章 (102期)

今年の3月で高校を卒業して15年が経つ。ついこの前まで高校生だと思っていたが、15年だとワインならばビンテージの域に入るだろう。産地、品種や年によっても異なるだろうが、しかし、他の同期よりも学生生活が長く、世間の波風に曝される機会が少なかったため、この15

年の間に世間が求める熟成を経たかは大いに疑問である。そこで高校を卒業して分かったこと。それを簡単に振り返ってみて、自分の熟成の度合いを検証してみたい。と書いていろいろ書こうとしたら、字数制限でそうもいかなかった。そこで今回は一つに絞って、学問と先輩について書かせて頂く。

学問・・・勉強というべきであろうか？高校時代は将来必要なこととは知っていたが、あまり真面目に取り組んでいなかった。取り組んでいたようにも思えるのだが、やり方が悪かったのだろうか。あまり成績はいい方ではなかった。それでも続けられたのは教師や先輩、同輩、後輩に大いに刺激されたからに他ならない。お陰で、大学に入ってからバイトで始めた家庭教師だが、自分が苦勞した分、いい家庭教師になり（と本人は思う）、参考書まで出すことができ（興味のある方は本名によく似たペンネームなので探してみてください）、大学院まで行き、今は研究所に勤務して毎日が勉強・研究の日々を過ごさせて頂いている。今まで私を支えてくれた皆様に大いに感謝し、その感謝に報いるような研究成果を出せればと思う日々である。

ここ数年、指導要領が年々減ってきていると聞く。個人的には一番勉強に適した時期にもっと詰め込んでもらえれば、もうちょっと今の苦勞は減ったかも思っている。ゆとりは大事だが、果たしてそのゆとりの時間が本当に有効に使われているのだろうか？聞けば、現在の高校生の50%の平均勉強時間は0らしい。授業だけで分かるからしないのかもしれないが、本来、その勉強する時間は何に使われているのだろう。勉強だけが全てだとは思わないが、折角、勉強に集中できる環境が用意されているのに、しないのは勿体無いし、することによって自分を豊かにし、自己の発見につながるのではないだろうか。多くの社会人が学問の重要性を痛感しながらも、その時間をなかなか取れないのが現実である。自分が経験しないと分からないだけでなく、これを伝える機会もないのが現実ではないだろうか。安積高校には多くの優れた先輩がいる。この先輩方も東京桑野会でお会いできた方々だったが、もっと先輩と在校生が触れ合う機会があれば、可能性を広げることが出来るのではないかと思っている。自分に限って言えば、まだまだ人前に出るには熟成が必要であるが。

(NTT中央研究所)

渡辺周一君のこと

大越 高紀 (73期)

73期卒業の渡辺周一君が、昨年9月16日膵臓癌で亡くなりました。62才でした。父親は昭和19年に戦死、遺骨は砂が少々入っていたと聞きました。母上は郡山市立図書館に職を得て定年まで全うされました。一人息子として何不自由なく育てられ、金透小、二中、安積入学でした。小生は金透小、四中、安積でした。安積入学の時同級になり学校帰りに4、5人の級友と清水台の彼の家に寄ったものです。学校の話、中学時代の同級の女の子の話、読んだ本の話、映画の話題、当時は石原裕次郎の絶頂期、プレスリーが話題になり始めた頃でした。安積の校風はバンカラが主流、「三当五落」といわれ県下でトップクラスの進学ランク、君は美術部、応援団で活躍、少々「我、が強く、負けずぎらい、寂しがりや、甘えん坊、仕切りたがり、世話好き、悪ぶりたがり、そんな高校生でした。昭和35年4月法政大学に入学、小生は家庭の事情もあり又、会社勤めは性に合わず進学をせず、国会議事堂から1km程の虎ノ門交差点近くの古美術店に入社。この年の秋頃だったと思いますが私の留守中に周一君が服は泥だらけで裸足、「大越君はいますか？金を落したので、借りたいので寄りました」と訪ねて来たそうですが、店の主人は明治生れの軍国主義崇拜者「帰れ！」の一言だったそうです。申し訳ないことでした。後に同級生だった高田宣美君と行動を共にしていると聞きました。安保闘争で女子大生が国会内で死亡した事件もこの頃でした。経緯は、はっきりしないのですが、代々木病院に十二指腸潰瘍で痩せ細って寝ていた所に見舞に行ったのを覚えています。次に彼の事が話題になったのは結婚したらしいとのこと、正月休みに帰省した折、白岩邦俊君、片倉洋三君、故伊藤紘一君と桑野に住んでいた母上に聞いてみようかと、訪ねました。その頃は都下町田市の和光学園の職員で、職場の高校教師（俊子夫人）と結婚し、25才で父親になったとのことでした。昭和48年、柏書房に入社、本人は編集希望でしたが、営業をまかされ、隠れていた才能が開花し、全国の書店巡りをし、200店の顧客を作ろうと思ひ努力したそうです。30才過ぎの営業、無理に覚えた酒、不器用な酒でした。「酒さえ飲み過ぎなければ」といろんな人が言いつつも、それほど嫌な顔をしてない

のは、不思議でした。この不況時に、全国の大学、図書館、専門家や研究機関等に、「歴史地図コレクション」などの1点数十万円以上の高価本を、年に十数点刊行した。これらの利益から、学術書、歴史書、翻訳書などの分野を出版しているが、その中に創立以来のベストセラー「アホでマヌケなアメリカ白人」（マイケル・ムーア）がある。4年前から会長になり、体調を整えようと漢方の鍼を北京まで行って打ったりしましたが腰の痛みや背中への痛みが何の原因か分からないまま入院に至った。退職したらゆっくり母親孝行、女房孝行をしたいと言っていたが、思い通りに行かず残念だったろうと思います。

(古美術店 有限会社 家紋 代表取締役)

水郡線通学

長沼 邑子(安女高校12回卒)

私は水郡線の水戸と郡山の丁度真ん中あたり、郡山から約2時間程の近津駅から朝1番の列車で通学していました。近津村は合併されて現在は棚倉町となり駅名だけが残っています。私が高校生頃は駅員さんが何人もいる瓦屋根のりっぱな駅舎でしたが今は無人で物置のような小さな建物がぼつんとあるだけです。上下1本の単線となった為に用済となった上りの線路は取りはずされましたが、ホームは当時のままです。見事に咲いて私達を楽しませてくれた数本の桜は、老木となって手入れもされず見る影もありません。車社会となって駅は忘れられた存在のようです。私は帰郷するとよく駅に行ってみます。2時間に1本の間隔での運行は当時とほとんど変わりません。列車（現在はディーゼル車）に乗るのは通学の高校生だけで、一般の人が利用する事はめったに有りません。

ホームから線路に下り枕木を踏んで歩いてみます。高校時代の私は家から駅まで毎日線路を走って通いました。県道（現在国道118号線）を歩くよりずっと近道だったし、何よりもやって来る列車が前方に見えました。近づいてくる列車といつも競走でした。走って行く私を機関士さんは時々待ってくれました。「あと1分早くおいで」と良く言われたものです。2両編成の列車（列車とディーゼル車が半々位に運行され、やがて全てディーゼル車になった）は1両に乗客は2～3人でいつも同じ顔ぶれです。私は1両目の真ん中あたりに座ります。近津駅か

ら4つ目の磐城石川駅で私の友達に乗ってきます。そして列車が郡山に近づくに従って様々な制服を着た高校生や通勤者が乗り込んで来てやがて通路までが身動きが出来ない程の混雑になります。私は石川から乗った同級生と向かい合わせに座り混雑を尻目にノートや参考書を膝の上のカバンに広げています。英文科進学を目指していた彼女は単語や短文の暗記に熱中し、理科系を目指していた私は数学の難問に取り組み、2人共あまり話をしませんでした。しかし東館駅を過ぎる頃になると、視線をノートに落としながらも気はそぞろとなり問題は少しも解けません。2本の白線の入った学帽を深々とかぶった安高生が列車が止まる度に車両の後方に増えてくるからです。彼らもそれぞれノートや単語帳らしきものに目を落として、中央付近に集まっている私達安女生の方は見ようともしません。列車が郡山駅に着くと前方に乗っている私達はすたすたと改札口を抜けてまっすぐ桜通りへ、安高生は駅を出ると左の開成山方向へと下駄の音を立てながら去っていきます。先に改札口を出た私達は時には改札口付近でカバンなど開けてぐずぐずしたりしていましたが、安高生は横をすっと通り過ぎて行くだけでした。胸が早鐘のように高鳴って「おはよう」の一言がどうしても言えませんでした。帰りの列車でも同様です。降り立ってはまっすぐに改札口を出ていく安高生の後ろ姿を列車の窓から見ていました。彼らも後ろを振り返るような事はしませんでした。たったこれだけの通学の愉しみが、一番列車に乗る過酷さと苦痛を和らげてくれました。あの駅から乗るあの人は何という名前なのだろうと心の中で

思いながらも聞くこともせず、憧れの安高生の乗車駅を見逃さないことが精一杯で、「おはよう」も「さよなら」も交わす事なく朝夕の列車通学が繰り返されていました。

兄妹校という意識は、親しみよりもむしろ負けたく無いというライバル意識となっていました。男子校に対する憧れと関心は胸の奥に閉じ込めて、私達は誰一人何のアクションも起こせずただ遠くから彼らを眺めていたのです。安女生という誇りとプライドが男子学生に声を掛けるなどという軽はずみな行動を許さなかったのです。その当時の安女生の典型でありそんな時代でもありました。今振り返ってみると、微笑ましいというよりは何てつまらない高校生活だったのだろとあきれてしまいますが、一方あれが私達の青春だったと胸が熱くもなります。

そうして私達は高校3年になりました。大学受験や就職で頭はいっぱいで、もはや白線2本の学帽は眼に入らず通学時間は受験勉強の為の貴重な時間になっていました。そんな6月のある日「安高生と交歓会をしよう」という計画が持ち上がりました。そんな大胆な計画を誰が思いついたのかは定かではありませんが私達の目は輝きました。3年間も同じ列車で通学していながら1度も話をせずに別れてしまうのは何としても残念だというのがその理由でした。安女生の中には中学時代同級生だった安高生がいるという事で（考えてみれば当然ですが）その人達が安高生との連絡係を引き受け、計画は着々と進みました。場所は水郡線沿線の守山中学校に決まりました。集まるのは水郡線通学の安高生と安女生の3年生です。しかしどういう訳かこの計画が

学校に知れてしまったのです。私達数人が放課後教員室に呼び出され、生活指導の松山先生に「引率する先生は誰か」と聞かれました。私達は一瞬戸惑いましたがそこはさすが聡明な安女生です。すかさず「安高の確か斉藤先生という先生です」と答えました。何の先生かと聞かれましたが「良く解りません」と切り抜けました。斉藤という名前は多いので安高にも1人位は斉藤先生が居るだろうとのとっさの判断でした。松山先生は制服を着用して行く事、安女生として毅然とした態度で接する事、の2つを条件に交歓会を許可してくれました。この条件は私達には容易なものでした。当時の私達は制服以外の外出着を持っていませんでしたから何処に行くにも制服でした。交歓会と言っても何しろ初めて言葉を交わしたのです。毅然とするどころか話題すら儘ならず終始無言で、当然の事ながら座はあまり盛り上がりませんでしたように記憶しています。どんな話をしたのかも今はもう思い出せません。自己紹介くらいはしたでしょうが、間もなく夏休みに入り残りの通学に日々は僅かでした。その日をきっかけに急速に親しくなる事も無く、その後の数か月は虚しく過ぎてしまいました。しかし私達はそれで充分満足でした。守山中学の裏山を歩いたこと、その日はさわやかに晴れ渡っていた事、それから安高生の中の誰かが持ってきたトランジスターラジオから松竹の青春映画「惜春鳥」の主題歌が流れていて皆で一緒に唄った事などが記憶の奥に焼きついています。いやこの記憶も、もしかしたら確かでは無いかもしれませんが。高校を卒業して既に40数年が経過しています。白線2本の学帽は記憶の中に今も鮮やかですが安高生は今帽子は被っていないようですね。安高生だけで無く全国の高校生が今は無帽なのでしょう。今や安高も安女も共学になりこんな高校時代の話は理解出来ないに違いありません。私自身、時の流れの早さに啞然とし高校生であった自分はもはや想像出来ない位です。ここ数年の価値観の変化は激しく、高校生のありようも大きく変わっていると感じます。街で見かける彼らは校則や勉強から解放され男女の区別なく自由を楽しんでいるように見えます。しかし、もしかしたらあの時代の私達の方が心豊かで充実していたのではないかと思ったりもしています。

私は30数年大学で学生に化学を教えるしていました。生命の誕生から延々と何十億年の時を経て、現在の私達がある事は言うまでも有りませんが、どの一瞬一瞬にも生命の精一杯の営みあったからこそ、



現代に続いているのだという事の凄さと有り難さを、私は化学という学問を通して学生に伝えたいいつも思っていました。そして学生時代は、それがどんな時代であれ宝石のように生涯光り続けるものだとも付け加えておりました。

あの時一緒に山道を散策した安高生がその後どんな人生を歩んだのかは知る由も有りません。しかし各々が思い思いの道を全うされたか、あるいは全うされつつある事は間違いないと思います。その時に写したたった1枚の写真です。前列右から2人目のおさげにしているのが私です。今は写真の面影はまるで残っていない初老のおばさんに変身しております。この写真に写っている安高生とシャッターを切っている安高生のどなたかが私の拙い思い出話を読んで下さる事を期待して止みません。

(歯科衛生専門学校 講師)

会報投稿が縁で 先輩と亡兄を追憶、 戦中の体制を思う

海村 伍男 (58期)

亡兄の追憶とは私事に類するもので、会報にはどうかと思ったが、戦中の若者が育った軍国主義国家体制のことも申したいためなのでお許しを願いたい。

会報は今までは、母校の息吹に接するためただ目をとおすだけだったが、前々号にあった記事について物申したくなり、前号に投稿した。その私の名前を見て、お二人からお手紙をいただいた。

一人は、安積二年のとき同じ組に居て親交を結んでいたが、工場動員等で離れ離れになり疎遠になっていた粒来哲蔵君からであった。粒来君は、教育界に進んだが、後、安積時代から手を染めていた現代詩創作の道に入り、今では数々の荣誉ある文学賞受賞に輝く現代詩壇の第一人者となっている。

もうお一人は、亡兄三十郎 (53期) の安積でも旧制山形高校でも二年下におられた森合敬忠先輩 (55期) からのものであった。

本稿では、森合さん (以下「さん」付けで失礼する) との出会いと六十年前の回顧、及び、頑健そのものであった私の兄をして戦病死 (訓練死) に至らしめたのは何だったのかということについて考えてみたい。

会報26号が発行されてから旬日を経たある日、筆太雄渾なお手紙をいただいた。

「海村という苗字と須賀川の奥の片田舎出ということなので、若しや海村三十郎さんの舎弟ではないか、若しそうならば是非お会いして先輩の追憶をしたい。場所は、会報に載っている鞍手茶屋でどうか」ということであった。まさに私はその舎弟なので、直ぐ承知申し上げ、鞍手茶屋の店主上野富衛さん (78期) に芳筵確保のお願いをした。

森合さんは、私が一年生のときの四年生で、在学中は一度ぐらいは「挙手の礼」を捧げたかも知れない方だが、岩瀬郡仁井田村からの自転車通学だったそうで、開成山大神宮近くの下宿していた私とは、通学方向が違うため面識がなかった。

鞍手茶屋は、地下鉄大手町駅の上にある近代的な居酒屋。約束の刻限に、傘寿に近いかつての四年生はいかなる風貌になっているかと待ち受けるうち、現れ出たるは、大柄で光頭・小振りの白鬚威風凛りを払い、実業界で鳴らした千軍万馬の将の風格漂う老紳士。

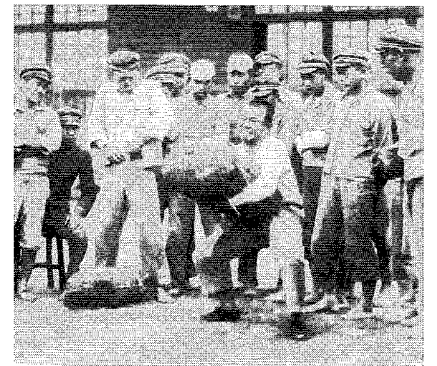
先輩は、柔和な、しかしキラリと光る眼差しで初対面の私を見て曰く「その眼鏡を外せば兄さんの面影があるかな…」。鞆からおもむろに取り出したのは、昭和18年4月の山形高校安積中学会コンパ時の5名の写真。当時のこととて坊主頭で詰め襟と和服半々、いずれも眼光ただならず。

このうち三年生二人 (兄ともうお一方) は、この後出された「修学年限短縮」の勅令により、この年の9月に卒業となり、8月には大学 (旧帝大) 入試、10月1日大学入学となった。

そして、大学に入学したものの、文科系は徴兵執行猶予停止となり、10月21日には例の明治神宮外苑競技場での出陣学徒壮行会が催され、陸軍は12月1日入営、海軍は12月10日入団となった。

私の兄三十郎もこの年の10月1日に東京帝国大学文学部印度哲学科に入学し、12月1日陸軍に入隊した。甲種幹部候補生としての訓練中、富士裾野の演習場において昏倒、腎臓摘出手術を受けた。当時の腎臓摘出は命取りであった。東京の陸軍病院に転院した後、郷家で療養中昭和20年8月15日の終戦を迎え、間もなく病状悪化して須賀川にある公立岩瀬病院に入院、昭和21年4月に不帰の客となった。

安積でも山高でも陸上中距離走者として勤い体力を鍛え、寒中、暖を取らずに毛布にくるまって勉強していたほどのが、んばり屋の兄が、苛酷な軍隊とは言え、どうして訓練に耐えることができなかったのか。兄は何も言わずに逝ってしまった。



体力章検定・土嚢運搬に頑張る兄

遣された日記からはその原因が窺われる。曰く「…軍隊は要領だと言う者がいる。もつてのほかなり…」と。

哲学科に進んだ兄の「個」の認識はいかなるものであったのか。

終戦直後、食糧事情が窮迫した中で、配給外の闇の食糧は摂らずに衰弱死した判事がいたが、それと相通ずるものを感じる。

自由の校風を謳われた安積中学、軍事教練の査察の講評で「第二師団管下で最低ノ不可ナリ」と酷評された安積中学、…実際はそんなに悪くはなかった、軍部の安積に対する「文弱の徒」という認識がそうさせた…、そのような安積中学ではあったが、当時の軍国主義国家体制の中にあつては、やはりその流れの中にあつたことは否めない。そのような体制の中で育った若者。「…善き者ハ早く逝く…」か。今、こんなことを言うと、「何を言うか!」と地下の兄に叱られるかもしれないが、私にはそう思えてならない。

さて、森合さんは、昭和18年9月に山形で別れてからの三十郎の消息をわからないでいたところ、昭和21年3月に公立岩瀬病院で再会したとのことであった。森合さんは (森合さんもというべきか) 軍隊で、スリッパ (…軍靴の上部をくりぬいた頑丈なスリッパ、初年兵の訓練に当たる上級兵が恣意的に私的制裁に用いた…) で左耳を強く殴られて鼓膜破裂の重傷を負い、これが悪化し、戦後、大手術を受けるため岩瀬病院に入院したところ、偶然にも同病棟の一室に兄の名札を発見し再会に及んだとのことである。

しかし、名乗りはしたものの、時已に三十郎は命旦夕に迫っていたため、何も話しをすることができなかつたと残念がっておられた。その代わりに今夕、君と追憶に浸りたいとおっしゃる。

なお、三十郎没後、前記の山高安積中学会の方々と榊衝の山の中まで墓参りに来て下さったとのことを母から聞いていた。

墓参と言え、兄に安積53期での親友

四人のグループがおられたが、三人が已に亡くなり、ただお一人お達者でおられる橋本（旧姓田村）正男様（須賀川市大字保土原字古戸在住）が、六十年経た今も、毎年彼岸の中日に、梓衝の山の中まで参られ供花を下さっておられる。お礼を申し上げたら、「私を残して皆逝ってしまった。墓参りは残った者として当然のこと…」とおっしゃられる。安積で結ばれた友情とは斯くも固いものかなと感銘を覚える。

鞍手茶屋における追憶の会はいつまでも話柄が尽きず、かつ、茶屋側の二老生に対する周到な心配りもあり、時を忘れ夕方5時から終電近くまで及んだ。

千客で賑わっていた茶屋が静かになるにつれ、二人の席には、故人の亡霊が近づき共に談じているかのごとき幽幻さが漂っていた。ために快酔し杯を傾けること頻りであった。

会報に投稿したことが縁で、森合さんとお会いでき亡兄の追憶に浸り、そして、当時の国家体制というものに思い至ることにもなった。

“安中四年生の悲劇”を二度と繰り返さないためには、あのような体制に戻さないよう努めるのが、生き残った者の使命と思う。

於鞍手茶屋與森合先輩偕亡兄
鞍手茶筵語古人 往時懷憶興趣新
雲上声有談吾亦 幽夢快酔拳觴頻

宇都宮桑野会設立と 宇都宮高校旧本館見 学のおすすめ

水口 禎 (67期)

母校創立120周年の記念すべき2004年7月、東京と郡山の丁度中間の地に私たちの兄弟会「宇都宮桑野会」が設立されました。

菅間会長、比企副会長、岩崎副会長、溝井幹事長始め多くの方々のご努力の賜物です。百余の会員のうち40余名のご参加という盛大な船出に際し、東京桑野会としても心からお慶び申し上げます。

同時に、東京から僅か百キロの宇都宮の会員各位には、これからも東京桑野会もお忘れなく引き続きご交流のほどをお願いいたします。

以下は、当日古川会長の代理で出席させて頂き、お祝いと会の前途への饒として、特に宇都宮の皆さんにおすすめしたこと——《宇都宮高校旧本館見学のおすすめ》——の報告です。

宇都宮桑野会会員のご子弟の多くが卒業または在籍されている、名門栃木県立宇都宮高校の校舎。現在名を正確に言えば「宇都宮高校旧本館（旧栃木中学校本館）」。わが母校と似たような歴史があり、県庁所在地の栃木町に創立、明治18年宇都宮に移り、同26年新校舎落成を持ち現在地に再移転。県内最古の学校建築です。現在は校庭の片隅に移築され、保存されています。

会員の皆様におすすめする直前、わが眼で確かめるべく訪問。高齢の母の妹に初めて会うようなわくわくする気持で尋ねた、わが母校（明治22年生）の4歳下（明治26年生）の宇都宮高校旧本館でした。

「この旧本館は、一県一校に限られていた明治20年代の尋常中学校建築として全国的に見ても数少ない極めて貴重な遺構である」（登録有形文化財）と銘板に記す。

かつて、明治建築史専門の河東義之氏が指摘された（会報6号（1985年）稚稿『昔はかっこいい』参照）「宇都宮の校舎は安積に雰囲気が大変似ている——特に二階の講堂が——」という内部は、休日で見られず残念でした。

外部は日光並木の杉材が用いられているという真っ白のペンキ塗りの外壁ですが全体像はわが母校を彷彿とさせる美しいプロポーションです。

河東氏のいう〈当時の地域における中学校建築に影響を与えた『安積ひな型』説〉に自ら納得しつつ、宇都宮桑野会設立総会の会場に急ぎました。

（東京桑野会副会長）

新潟県中越地震、 そして新潟脱出行

増子 邦雄 (71期)

平成16年10月23日土曜日、あの新潟中越地震が起こった日、私は佐渡島にいた。毎年恒例となった大学時代のゼミ仲間との旅行であった。これはその時の新潟脱出の記録である。

23日は朝から北風が強く吹き、西海岸に面した尖閣湾には白波が立っていた。

我々一行が佐渡の名所旧跡を巡り、真野湾に面した老舗のホテルに着いたのが午後4時半。ひと風呂浴びた後、夕食宴会が始まる直前の午後5時56分、それが起きたのである。

午後6時からの夕食のために少し早めに席についた我々は、急に尻の下がぐら

っと動くのを感じた。「うん？地震かな」と、そのとたんぐらぐらと部屋全体が揺れ、テーブルの上に並んだ食器がカタカタとなった。

「こりゃ大きいぞ」と、床の間のテレビに手を伸ばした。テレビは「ただ今、新潟県中越地方で強い地震がありました。沿岸近くでは念のため津波に注意して下さい」と告げていた。

中越地方が震度6強（後で震度7に訂正）であったことをテレビが告げた直後に震度4の強い余震がきた。

宿がコンクリート造りで我々が居た場所が2階であったこともあり、それ程の揺れは感じられなかったが、その後夜半にかけて身体に強く感じる余震が数回起きた。

東京の家族に一齐に携帯電話をかけるが、これが全く繋がらない。携帯電話も災害緊急時には便利なようで、案外役に立たないものだ。

地震発生の1時間後には新幹線が脱線したとの情報が流れた。次の日は、午後佐渡を離れる予定だったが、全てキャンセルして出来るだけ早く新潟駅まで戻る事にした。

翌朝、10月24日は無風、晴天で夜が明けた。このまま佐渡を離れるのが勿体ないような天気である。海のすぐ向こう岸で大災害が起こっているとはとても思えない。しかし、大地震が発生したのは事実なのだ。とにかく早く朝飯をすませ、できるだけ早く宿を発つ事だ。

7時朝食、8時にレンタカーで西海岸のホテルを出発、東海岸の両津港まで走る。日曜の朝のせいか、8時半には両津港に到着、幸いにも9時半発のジェットホイルに予約変更ができた。

その後、続々と新潟に渡る人たちがターミナルに押しかけ、早々に指定席は満席となった。あとはキャンセル待ちとなったが、こんな時にキャンセルが出るわけもなく予定変更の第1歩は正解であった。これが、後々幸運にも東京に予定通り帰れた布石となった。

ジェットホイルは予定通り10時半新潟港に到着、新潟駅へ向かう。新潟駅は上り列車に乗ろうとする客でごったがえしている。新幹線は不通のまま。在来線も信越／上越線などほとんどのローカル線は不通の状態が続いている。

どうしたら東京方面へ行けるか。いろいろなルートが考えられたが、ここは福島県出身の土地勘で郡山経由しかないと判断した。

その日の朝の情報では、磐越西線も不通だと言う。郡山行き的高速バスは午後5時20分発までない。最悪それまで待た

ねばならぬかと覚悟した矢先、幸いにも早朝まで不通だった喜多方／新津間が開通したと言う。多分線路点検の為の不通だったのだろう。

新潟から東三条まで部分開通していた信越線で新津まで行けば、新津発、会津若松行の磐越西線に接続する事が分かったのが、発車2分前の11時3分。会津若松からは郡山行きの快速列車に接続していると言う。これに乗り損なうと、午後4時過ぎまで新潟から郡山方面への列車はない。

駅員は「切符はそのまま乗って下さい」と言う。とにかく、「何に乗ってもよいから自分で判断して東京まで行って」と言うことなのだろう、切符を持っていない者には小さな紙片を渡して「下車駅で精算して下さい」と言う。

新潟駅は大混乱の極みであった。我々仲間は駅の階段を駆け上がり、向かい側のホームで待っている東三条行の列車に飛び乗った。これで何とか郡山までたどり着けそうだ。予定通り会津若松から郡山行の接続列車に乗れば、午後4時頃には郡山に着く筈だ。

新潟を3分遅れで発車した列車は、11時30分に新津駅に着いた。途中の街は、すぐ近くであのような大地震が起こったなどとは到底思えないほど平穏である。

11時33分新津発の会津若松行普通列車は、約10分遅れで発車した。

磐越西線は単線である。途中の駅でしばしば待ち合わせがあり、会津若松駅には約15分遅れて着いた。

会津若松駅は田舎の駅である。新潟から来た、平常時では考えられない数の乗客が郡山行が発車する狭いホームへ殺到する。ホームだけではなく、階段でも新津へ折り返す列車に乗ろうとする客と押し合いとなった。全員が乗り終えて発車した時には、出発予定時刻を20分以上も過ぎていた。

列車は満員である。快速だから郡山には約1時間で着く。まさか磐越西線で郡山入りするとは予想もしなかった。郡山から乗った新幹線はさすがに週末のせいもあり、ずっと立ちんぼではあったものの、午後5時24分に無事東京駅にすべりこんだ。

おもえば、佐渡の宿をあわてて飛び出してから9時間半の長旅であった。あの地震がなく、予定通りスケジュールをこなして新潟から上越新幹線で帰れば、東京には午後5時27分に着く筈であった。

3分の差はあったが、これで帳尻は合ったわけである。しかし、新潟駅からわずか2時間足らずで帰れるものが、6時間半もかかったのだからやっぱり地震は

恐ろしい。

(山縣記念財団 常務理事)

「スーパーサイエンス ハイスクール(SSH) 分野別講演会について」

渡部 良朋 (91期)

平成16年度は、安積高校が文部科学省の「スーパーサイエンスハイスクール(Super Science High School)」に指定され3年目でした。東京桑野会では、母校からの要請により、「分野別講演会」に協力しております。その経緯や顛末について、少しお知らせしたいと稿を起しました。

SSH 2年目の平成15年度に、「科学技術の世界で働く安積OBから、在校生に直接、話をして貰えないだろうか」という要請が、母校のSSH事務局から東京桑野会にありました。これは卒業生の半数以上が首都圏の大学に進学し、また首都圏で職に就いているという現状から、東京桑野会に依頼するのがベターである、と母校の先生方が考えられた結果です。東京桑野会の重鎮方にご相談し、私が「使い走り」の役を務めさせて頂くこととなりました。母校ならびに東京桑野会の執行部や各期幹事の皆さんと相談しながら、内容や講師について段取りを進め、平成16年2月に「SSH分野別講演会」を開催しました。最終的には、科学技術の分野だけではなく文系(社会科学的、実業的)の分野も含めて実施する形となり、その詳細は東京桑野会HP・SSHのページに掲載されております。なお、SSH事務局で生徒の皆さんにアンケートを実施したところ、約9割の生徒さんから肯定的な評価を頂いたようで、よかったよかった。

そしたら、「平成16年度もやりたいな〜」、との再要請を母校から頂きました(これは喜んで良い評価だと...)。第1回目に講師として協力頂いた皆さん、そして新たな安積OBの協力を得て、第2回目の分野別講演会を平成16年10月26日に開催することが出来ました。

分野別講演会の対象は1年生*で、進路選択に役立てるため諸分野で活躍するOBから仕事に関わる話を聞くということで、10名の講師は各自60分×2回の講演を行いました。生徒さんは、2つの講演を聞くことができた訳ですね>(*現在のカリキュラムでは、2年次に文系・理系に分かれる)

分野別講演会の内容を以下に記します(期、所属、演題)。理系が6つ、文系が4つです。

角田欣一氏(85期、群馬大学工学部、「研究者ってどんな職業? - 化学者の場合 -」)

村上昌弘氏(85期、共立女子大家政学部、「食品の味を科学する」)

櫛田浩平氏(86期、日本原子力研究所、「身近な放射線から考える - 不安定な自然・宇宙・生命 -」)

高原 茂氏(89期、千葉大学工学部、「光化学とCD-R」)

渡部良朋(91期、(財)電力中央研究所、「生物機能を利用して有害化学物質を計測する - 最先端のバイオセンシング -」)

遠藤泰志氏(95期、国立がんセンター、「癌の診断と治療、その中での病理医の役割」)

渡辺 清氏(90期、東京三菱銀行、「激動のメガバンク」)

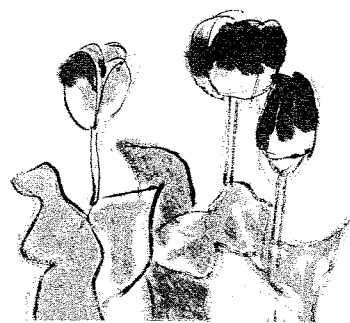
増子昌也氏(91期、講談社、「出版社での仕事 - 想像力を鍛えよう -」)

佐々木隆志氏(93期、一橋大学商学研究科、「会計プロフェッションの世界と商学を学ぶということ」)

加藤祐一氏(105期、弁護士、「模擬『行列のできる法律相談所』」)

どうですか、この内容。ワタクシは、エマージェンシー対応要員ということで名前を連ねさせて頂きましたが、「わがしゃべってね〜で、ほかの講師のお話を聞きつつがったぞい!」って思いました。母校としては、このような行事を是非恒例のものとしたいとのことですし、東京桑野会には、面白い話をして下さる人材が沢山おります。母校では、このような事業に協力して下さるOB諸兄は大歓迎とのことですよ(本家の「平成16年・安積桑野会たより」にも記載されております)。今後も東京桑野会は、母校の要請に応じて参りたいですよ。さあ皆さん、東京桑野会・SSHパシリの渡部まで、コンタクト下さい。

(財)電力中央研究所 環境科学研究所



カット：山本 圭 (58期)

東京桑野会役員名簿 平成17年2月1日現在

□役員

役職	氏名	期	勤務先・自宅住所	電話
会長	古川 清	63		
副会長	大津 隆	63		
副会長	水口 禎	67		
副会長兼 幹事長	斉藤 英彦	69		
副会長	増子 邦雄	71		
副会長	高松 豊	74		
副会長兼 副幹事長	櫻井 淳	78		
副幹事長	丹治 則男	81		
副幹事長	渡邊龍一郎	81		
副幹事長	村上 昌弘	85		
副幹事長	坂本 浩一	86		
会計監査	川井栄一郎	65		
会計監査	近内 靖夫	69		
顧問	高瀬 禮二	46		
顧問	吉田 弘俊	52		
顧問	竹花 則栄	55		
顧問	星 武典	58		
顧問	小浜 精吾	58		

□幹事

役職	氏名	期	勤務先・自宅住所	電話
幹事	佐藤 義重	50		
幹事	撞井 保夫	51		
幹事	小宮 茂	53		
幹事	佐久間盛政	54		
幹事	結城 洸	55		
幹事	石川 衛三	57		
幹事	池田 和男	58		
幹事	小針 久	59/60		
幹事	佐藤 啓	61/62		
幹事	村山 俊司	61/62		
幹事	鵜沼 直雄	63		
幹事	谷本 滋朗	63		
幹事	渡部 喬一	64		
幹事	宇田川保夫 (本田)	64		
幹事	佐藤 司	64		
幹事	伊藤 巖	65		
幹事	清治 和昭	66		
幹事	橋本大三郎	66		
幹事	横尾 稔	66		
幹事	遠藤 修	67		
幹事	伊藤 泰昭	68		
幹事	青山 掌三	68		
幹事	有我 政彦	68		
幹事	佐藤 廣	69		
幹事	石井 敬治	70		



役職	氏名	期	勤務先・自宅住所	電話	役職	氏名	期	勤務先・自宅住所	電話
幹事	矢吹 晋	70			幹事	川口 勝広	83		
幹事	渡辺 哲弥	70			幹事	小林 伸久	84		
幹事	武藤 勇司	71			幹事	境 君夫	85		
幹事	大内 博文	71			幹事	芳賀 雅美	86		
幹事	大和田允彦	71			幹事	本田 宏	86		
幹事	遠藤征志郎	72			幹事	坂路 誠	87		
幹事	遠藤 宏司	72			幹事	富塚 弘之	87		
幹事	菅野 一雄	73			幹事	大矢 真弘	88		
幹事	関根 健治	73			幹事	渡辺 政信	88		
幹事	武藤 一駿	74			幹事	鈴木 修一	89		
幹事	伊豆 秀雄	74			幹事	有我 明則	90		
幹事	今川 直人	75			幹事	渡部 良朋	91		
幹事	柳田 力	75			幹事	増子 浩重	92		
幹事	満井 和正	76			幹事	斎藤 宏海	93		
幹事	浅川 章	76			幹事	阿部 力也	94		
幹事	蔭山 信重	77			幹事	鎌田 光明	94		
幹事	草野 幸次	77			幹事	藤田 健彦	96		
幹事	椎野 靖啓	78			幹事	佐藤 厚	97		
幹事	宗像 良保	78			幹事	小野崎 敦	97		
幹事	大竹 英雄	79			幹事	宗像 孝	97		
幹事	山元 紀美	79			幹事	遠藤 昌明	99		
幹事	上石 利男	80			幹事	佐藤 誠幸	101		
幹事	安部 直文	80			幹事	川前 徳章	102		
幹事	斎藤 誠	81			幹事	土田 隆弘	105		
幹事	石井 俊一	82			幹事	加藤 祐一	105		
幹事	古川 清志	82			幹事	稲垣 直規	106		
幹事	永山 幸男	82							

小橋クリニック

院長 小橋主税 (86期)

福島県須賀川市仁井田大谷地172-3
TEL 0248-72-1555

編集後記

○今回初めて会報の編集に参加した。ホームページ委員会として、広報部会のほんのお手伝いのはずだったのに、すっかり嵌められてしまった。原稿依頼・回収や編集作業は、ベテランの広報部会メンバーがテキパキとこなし、会報はこんなふうに出てくるんだなあといたく感心した。しかしながら昨年まで印刷・出版をお願いしていたパンオフィスの決別したため、新たに製作委託先を探したり、宛先の会員名簿の更新をしたり、従来なかった作業が発生した。このあたりでお手伝いが出来たかと、自負している。

皆様に無事に届けすることができましたことに、感謝、感謝。(がっちゃん)
○今回初めて会報編集作業のほんの一部に携わった。私は、ゲラ刷り原稿チェックのお手伝いをしただけだが、広報部会に所属する先輩方は、原稿依頼・回収に始まり、印刷業者との折衝、校正に至るまで、編集プロダクションさながらの仕事、本業の合間を縫って手弁当で遂行していた。安積をこよなく愛していなければできないことではない。

近年、卒業アルバムを購入しない大学生が増えてきているという。母校に対する帰属意識の薄れが進行するのは寂しい。それに比べ、何歳になっても母校の話題を肴に一杯やれるわが境遇は、至福だと思う。

今号では、海外で活躍されている卒業生の声をより多く拾っており、安積の国際性を垣間見た思いがする。また、女子一期生や在校生の奮闘ぶりに頼もしさを感じたのは私だけではないと思う。

「変わらぬためには常に変わっていかねばならない。もしかしたら、安積高校に在学した3年間にこれほど変わった、ということが120年変わらなかつた伝統な

のかもしれない」(玄祐宗久『松に古今の色なし』より) 味わい深い言葉である。

(さっちゃん)

○今回のイラストは58期の山本佳さんです。山本さんは歯科医師です。同窓の患者も多くお世話になっているようで評判は天下一品とのこと。山本先生は実は絵も書も玄人跳で作品はなん度となく展覧会でも私は見ておりました。

ある日、上野の都美術館あたりでピタリと出会うことができました。「ご縁があるんだねえ」と先生。「いや、実はコレコレでヨロシク…」とイラストをお願いすると、あのニッコリ笑顔で「ア…、ウウウウ」と言ったようなお返事でした。共通語にすると「ア、ソウワカッタヨ」となります。しかし、私の舌足らずで横長サイズを説明しておきませんでしたので、先生の作品は編集や時間上のこともあいまって2点だけの掲載となってしまいました。横長の空間は急遽、私の本宮から見た阿達太良の作品でカバーしました。

編集会議に86期の芳賀さんはじめ数名の精鋭が参加し、常連化したことや寄稿にも117~120期の文章が見られるなど今後の会報の進展はいよいよ万全だと思います。私にとっては実に好機、広報交代の潮時です。裾野の広さに心強さを感じつつ、バトンを渡します。

(74期 高松豊)

○特集・海外で活躍している仲間達からの便りはホームページ委員会の成果です。原稿のやり取りの中で、松津元パナマ大使(71期)の訃報が確認されました。「中国での単身赴任」の渡辺さんは以前会報作成にも参加されたはず、楽しいそして大変な近況を読みました、活躍を祈ります。「水郡線通学」は汽車通学の思い出、安女高校12回は、安積73期だそうです。思い当たる人は広報部まで、レモンの香りのする原稿でした。120期の小檜山さんは歯切れの良い素晴らしい文章でした。

末恐るべし、どうも女性の方が優秀との噂、本当みたい。長い間この会報の編集広報をして頂いたパンオフィスの川鍋さんご苦勞さまでした。(78期 櫻井)

事務局便り

●会報の発送は、会員各位の住所動向に大きく左右されてしまいます。住所が変わっていると、せつかくの会報も戻ってきてしまうので、住所変更の際は東京桑野会の事務局まで、ご連絡下さるようお願い致します。安積桑野会の方にご連絡された方も、ご面倒でも東京桑野会の方にもご連絡下さい。

●総会の出欠葉書を同封していますが、事務処理の都合上葉書には必ず住所、氏名、期を記入して下さい。時々ご自分の期と卒業年を間違えておられる方がいらっしゃいますが、会報をお送りした封筒の宛名ラベルの右下に記入してあるのがご自分の期ですので、お間違えないようお願いいたします。勤務先は変更がなければ省略していただいても結構です。

そして、連絡もれもあるかと思われまますので、お誘い合わせのうえ、多数のご出席をお願いします。

『東京桑野会会報』No.27

2005年4月1日発行

発行・編集人●古川 清

発行所●東京桑野会

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-3-8

YKB新宿御苑804

齊藤法律事務所気付

Tel 03-3356-6677 Fax 03-3356-6678

E-mail info@tokyo-kuwano.com

URL http://www.tokyo-kuwano.com/

製作●株式会社キタジマ

〒130-0023 東京都墨田区立川2-11-7

Tel 03-3635-4510 Fax 03-3635-4515

鞍手茶屋

東京で福島のけんちんともちを!!

——昼はそば、夜は酒と肴——

霞ヶ関店 〒100-6001 東京都千代田区霞ヶ関3-2-5 霞ヶ関ビル1F 電話 03-3581-7066

大手町店 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-1-3 大手センタービルB1 電話 03-3213-2385

中山峠店 〒963-1304 福島県郡山市熱海町国道49号線中山峠 電話 0249-84-3774

(店主) 上野富衛 (78期)